
インフィニット・ストラトス～緋色の弾丸と白の騎士

チキン執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜緋色の弾丸と白の騎士

【Nコード】

N6416X

【作者名】

チキン執事

【あらすじ】

遠山キンジ、HSSという不思議な力を持った彼と、織斑一夏、唐変木で鈍感なフラグ乱立魔の彼が織り成すクロスストーリー。

頑張っ て書いていこうと思いますのでよろしくお願い致します。

始まりの始まり（前書き）

一週間悩んだ結果。のコレです。

もうひとつの方も頑張らせて頂きますのでよろしくお願い致します。

始まりの始まり

「キーンジ！」

チユンチユンと、小鳥のさえずりが聴こえるなか、その声が聴こえた。

とても幼いアニメ声、そちらを向いてその声の主を見てみると、なんと言うか声相応の身体のサイズをした小学生……じゃないか、高校生が立っていた。

「……おはよう」

その人物の名は、神崎・H・アリア。

そんな小さく幼い風貌の彼女だがこいつは双剣双銃カトラのアリアと呼ばれていて、武偵からは期待の眼差しで、犯罪者からは狙われたら終わりの人物と呼ばれている。

「あれ？アンタ元気無いわね。どうしたの？」

「……ああ、そうだよ元気ないよ。どっかの誰かさんに夜中急に呼び出されて自主練させられなきゃきつと……いや、それでも無理か……」

そう。もし、それがなくなっただとしても俺の元気が戻ることは到底ないであろう。

理由は簡単。

俺が今から向かうところだ。

「まあ、アンタみたいなのが、『アレ』を使えちゃうなんてねえ…。
…。あれ？何人目だっけ」

「二人目だよ」

それをいつてまた、心が黒く荒む。

あー今すぐにでも帰りたい。

武偵高に愛着が沸いたのなんて初めてかもしれない。

そう、俺はもうしばらくは武偵高に行けないんだ。

俺が、あんなものを動かしてしまったせいで。

インフィニット・ストラトス。

通称、IS。

あれが、あの事件が全ての始まりだった。

ガウン、ガウン！

無機質に響く、空調の音。

あまり広いとは言えない輸送貨物庫の中、俺達は居た。

——最新兵器と共に。

俺達、バスカービルのメンバーはとある任務を受けていた。

その任務とは、

『ISを死守せよ』

という単純明快、なおかつレベルのすこぶる高い任務であった。

……俺からしては、だが。

IS、と言うのは正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出の目処は一向に立たず、無駄にスペックをもて余した機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』へと落ち着いた——所謂、飛行パワードスーツだ。

そして、コレには決定的な欠点がある。

それは、

『女性にしか動かせない』

だ。どんな欠点だよ。ってなるだろ？

そう思った偉いやつが嘘だと思ってISに触れてもホントに何も反応が無かったらしく、その事は証明されてしまったとかなんとか。

そして今、その兵器のせいで世界のバランスは崩れつつある。

それは、女尊男卑。

まさに昔とは真逆。女が有利なこの社会。

まあ、その世界バランスを崩している兵器の護衛を今、俺達はやらされている訳だ。

「ねえキーくん。理子気持ち悪い……」

隣に居た自分を理子と名乗る女の子。

こいつの名は峰 理子。

普段はおどけた感じで意味のわからん単語を連呼しているが、本気になるマジでヤバイ。

てかおい、吐くなよ？

「きゃっ、何するの！？もう！抱き付かないで！抱きついて良いのはキンちゃんだけなの！」

うん。それはそれでおかしい事に気が付け白雪。

ああ。この巫女さん姿の彼女は、

星伽白雪。星伽神社という所の巫女で俺の幼馴染みだ。

……暴走癖のある、な。

「白雪さん、理子さん落ち着いてください。音を聞き分けづらくなります」

そう言葉を発したのは、レキ。

彼女はレキ。一部では感情が無さそうと言うところからロボット・レキと呼ばれている。

そんな彼女は狙撃科のSランク武偵。

貴重な戦力の一人だ。

「な、なあトオヤマ。こんなんで大丈夫なのか？」

困惑。といった表情でこちらを見るのはエル・ワトソン。

彼女……いや、彼は衛生科なのだが、出来るだけ人員を多くしてほしいという願望のもと、ワトソンも共に、ということになった。

そして最後に、

「あー！ー！！もう！うるさいうるさい！！アンタら黙らないと風穴！」

……こいつはもう言ったはずだよな。

ピンク色のツインテールでもまん好きの彼女。

神崎・H・アリア。そのひとである。

コレが、俺達バスカービルメンバー！

多分、いや殆どの確率で、失敗は無いだろう。

——そう思ってた時期が、俺にもありました。

結果？…ああ結果ね。大丈夫。

確かに敵は来たんだが、

敵が持っていたのは、グレネード、UZI。

敵の数は5人。

まずアリアと理子と白雪が全線に出て、その後ろでレキが援護射撃。ワトソンは中距離からの射撃で俺の出る幕もなく、あっさりと終わってしまった。

だが、そこで俺はやらかしてしまった。

ISに、女性にしか動かせない欠陥兵器に、

『触れてしまった』

その時、俺の頭にキンッ……という音が聴こえ、様々な情報が流れ込んできた。

『IS』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、e t c . ……。

まるで元々知っているかの様に、理解ができる。

そして視覚野に接続したセンサーが直接意識にパラメーターを浮かび上がらせ、周囲の状況が数値で知覚できる。

「って……まてまてまて！！何なんだ？」

動いてる。

『女性にしか動かせない欠陥品が男によって動かされてしまっている』

その事実。

肌の上に直接何かが広がっていく感触——皮膜装甲展開、……完了。
突然身体が軽くなる無重力感——推進機正常作動、……確認。

そこまで確認して、ひとつの声が、

「あ、あんた、そ、ソレ……」

驚愕に見開いた赤い瞳が、何とも印象的だった。

「……ンジ、キンジ！」

「はっ！！」

アリアの呼び声で現実に戻る。

どうやら軽く現実逃避をしていたらしい。

いかんいかん、気を付けよう。

「……キンジ、アンタ大丈夫なの？」

呆れたような表情でこちらをのぞきこむアリア。

「大丈夫、だと、思いたい……」

「はあ、ほら着いたわよ、『IS 学園』」

ここは、IS学園。名の通り、IS専門の学校だ。

それを確認して、深いため息が出る。

「……最悪だ」

その理由はとても簡単。

ISは、女しか使えない。

その意味をご理解いただけたか？

つまり、この学校には、女しか居ないのだ。

何？天国？死ね。俺からしては地獄なんだよ。

俺には、HSSがあるから。

HSS。——ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

性的興奮を得ることによって、超人的パワーを得ることが可能。

つまり、『異性』に興奮をすることによって得られるもの。

この力が今までどれだけ俺を苦しめてきたか……。

よし、止めよう。これ以上考えていたら胃に穴が開く。

「ああ、アリア。ここまで送ってくれてありがとな。じゃ」

出来るだけ笑顔でそう言うと、

「は？何言ってるの？あたしも入るのよ」

……さらっと、

さらっととんでもない事言い始めましたよこいつ……！

「アンタねえ…自分の立場分かってる？今や『世界で二番目にISを起動できた』男なのよ？護衛の一つや二つや三つや四つや五つ付いてもおかしくないわよ」

「いや、それはおかしい。てかISを起動できた男なんて俺以外にいたんだ……」

おお嬉しい嬉しい。

これで俺がパンダになる確率が50%減ったな。

「ほら、そんなことより、早くいくわよ」

アリアは俺の前を早歩きで歩き、目の前にそびえる学園へと足をふみいれていった。

始まりの始まり（後書き）

はい。どうも。

誤字、脱字、感想なども送ってくれと嬉しいです。

これからもよろしくお願い致します。

二人目の（前書き）

二回目の投稿です。

二人目の

一夏side

今日は高校の入学式。

新しい世界の幕開け、その初日。

それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

（これは……想像以上にきつい……）

ナルシスト発言とかではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

大体、席も悪い。

なんで真ん中&最前列なんだ。

めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。

俺は、ちらりと窓側の方に目をやる。

「……………」

何かしらの救いを求めている視線だったんだが、薄情なことに幼馴染みの篠ノ之箒はふいっと窓の外に顔をそらした。

何てやつだ。これが六年ぶりに再会した幼馴染みに対する態度だろうか。……もしかして、嫌われてる？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

うおっ、いきなり大声で呼ばれたから思わず声が裏返ったぞ。案の定、女子特有のクスクス声が聞こえてきて更に落ち着かなくなってきた。

別に俺は女子に対する苦手意識はない。ないけど、でも限度ってものがあるだろう。

ラーメン好きだって毎日三食ラーメンだったら飽きるだろ?。

いや、わからんけど。

俺そこまでラーメン好きじゃないからなあ……って、そういう話じゃない。

とにもかくにも、クラスで男子は俺だけ。

他の生徒二十九名が女子。

副担任も女性。担任は……知らないけど女性らしい。

らしいというのはまだ顔を見ていないから。一体何してるんだらうね。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今、『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

気が付くと副担任の山田真耶がぺこぺこ頭を下げていた。しかしあんまり頭を何度も下げるので、微妙にサイズのあっていないさそうな眼鏡がずり落ちそうになっている。

というかこの人はホントに年上なのだろうか？同年と言われれば普通に受け入れてしまいそうだ。

「いや、そんな謝らなくて、大丈夫ですよ？自己紹介、しますから」

「ほ、本当に？本当ですか！約束、ですよ！？」

がばつと顔を上げ、俺の手を取り、熱心に詰め寄る山田先生。

……あの、またすごい注目を浴びてるんですが。

しかしまあ言った以上、引くわけにはいかない。

ここで溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た。

しっかりと立って、後ろを振り向く、

(うつ……)

今まで背中に感じていただけの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する。

さつき薄情にも俺を見捨てた筈ですら横目でこちらを見ている。

流石にこんな風に注目されると、いくら女性に苦手意識のない俺でも——いや、この話はもういい。

「えー……えっと。織斑一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的に頭を下げ、上げる。——ちょっと待て。なんだその、
もつと色々喋ってよ』
的な視線は。

そしてこの『これで終わりなわけがないよね』的な空気はなんだ。

……別に喋ることなんてないんだが、ほら、
趣味とかも別に聞いてほしいわけでもないし。

あゝ。筈、助けてくれ……ってうわ、目を逸らされた。

（いかん。まずい。ここで黙ったままだと『ネクラ』の称号をいた
だいてしまう）

俺は一度息を吐き出し、新しい空気を吸い込み、ひとつの言葉を紡
いだ。

「以上です」

ガタタツ。思わずずっこける女子が数名いた。
どんだけ期待してるんだよ。無茶いな。

「あ、あのー……」

背後からかけられる声。涙声成分が2割増ししている。え？あれ？駄目でした？

パンツ！いきなり頭を叩かれた。

「いつ——！？」

痛い、という無脊椎反射より、あることが頭をよぎった。

この叩き方——威力といい、角度といい、速度といい、とある人物——よく知っているとある人物と同じような感じ何ですが……。

「……………」

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身。よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭いつり目。

「げえっ、関羽！？」

パンツ！

また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。音もでかいから女子が若干引いている。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。俺には既にドラの効果音まで聞こえているんですが、はて。

——いや、しかしまて。何で千冬姉がここにいるんだ？職業不詳で月一、二回ほどしか帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。それと、『アレ』と丁度あったんでな。つれてきた」

おお、俺の聞いたことが無いほどの優しい声。………てかアレってなんだ？何を連れてきたんだ千冬姉は。

「い、いえ！副担任ですからこれくらいは当然です！」

さっきの涙声とは打って変わって若干熱っぽい位の声と視線で担任に答えた。

「諸君、ワタシが織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私のいうことをよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出きるまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは絶対に聞け。いいな」

なんという暴力発言。間違いなくこれは俺の姉・織斑千冬。

しかし聞こえたのは困惑のざわめきではなく、黄色い歓声だった。

「キャー……！！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて来たんです！北九州から！」

いや、別に南北北海道でもいいけどさ。

「あの千冬様にご教導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

きやいきやいと騒ぐ女子たちを、千冬姉はうつうつしそんな顔で見る

「……毎年、よくもここまで馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それともなにか？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

これがポーズでなく、本当にうつうつしがつているのが千冬姉だ。

もう少し優しく接すれば良いのに。

「と、まあ、ある程度紹介も終わったところなんだが、まだ紹介していないものが約5名いる。入ってこい」

そう言った千冬姉の後に教室のドアが動き――。

そこで、みんなの動きが、止まった。

入ってきたのは、ピンク色の髪をした、小柄な女の子、そして、に薄い青色の髪をした無表情な娘、日本人特有の真っ黒な髪の毛の娘、そして服装が、何て言うんだろ……フリル？がたくさんついた服を身にまとった女の子とそして――。

IS学園の制服をまとった、『男』だった。

二人目の（後書き）

次の投稿あたりでセシリア戦の話に持っていけるといいナ……。

似た者同士（前書き）

二日連続投稿！

これからも頑張ります！

似た者同士

キンジ side

ザワザワ……。

周りが静かになった後、また周りの皆がざわつき始める。

「お前ら、挨拶しろ」

というえーっと……織斑……だったか？先生の声でレキが動き出した。

「私の名前はレキです。名字はありません。キンジさんの護衛として武偵高校からきました。実際は二年生ですが別に敬語は使わなくて結構です」

その紹介が終わると周りの女子が少し騒ぎ出す

『あ、あの娘可愛い』

『えー？私はピンクの髪の娘がいいと思うけどなあ』

「んんっ！！ゴホンゴホン！」

そのざわつきをおさめるためか、織斑先生がわざとらしく咳払いをする。

そしてそのまま、此方に目をやり、目で

『続ける』

と語ってきた。

すると理子が、

「皆さん始めましてえー！理子の名前は峰理子でえーす！好きなものはギャルゲーだよ！あだ名は理子ちゃんでも、りこりんでも、なんでもいいからね！あ、あと理子もキーくんを護衛するためにここにきましたあ。みんな仲良くしてねえ！！それと私もタメ口でOK！」

と、明るく自己紹介をしたお陰か周りが理子を見る目が明るい。

こいつはどこでも直ぐに慣れるな。

そして次に、

「え、えつと、わ、私の名前は、星伽白雪と、言います。ここにきた理由は、レキさん達と一緒にです。IS関連以外のことなら気軽に何でも聞いてください！」

そついい終わるとすごい涙目でこちらを見てきた。

おお、わかるわかる。

きつと心の中では『きんちゃん！？助けてえ〜』とか喚いているのだろう。

よくやった。お前は頑張ったよ白雪。

さて、お次は――、

「私の名前は、神崎・H・アリア。東京武偵、Sランク武偵よ。私
がここに来た理由は、キンジを護衛するため。それじゃいちねんよ
ろしゅきゅ……………」

噛んだ……。

あのばか、噛みやがった。

ヤバイ、ここで誰かが笑ったりしたら……。

『あ、あんたら全員風穴あ……!』

ズガンズガンズガンズガン……!

あわわわわわ……!

簡単に想像できてしまうところが更に怖い。

どうなる……と、思っておそろおそろ前を見ると、

「キャアーーーー!」

何て言う黄色い歓声が聞こえてきた。

『アリアちゃん!?アリアちゃんって呼んでいい?』

『ねえねえねえねえ!今夜暇?じゃなくてこのあと暇!?』

おい、こいつ危ないぞ。

「えっ？えっ！あっ！」

予想外の反応にパニックじやうたいに陥るエリア。

だよな、こいつ友達付き合いとか苦手であまり人と話さなかったもんな……。

ってなんだ？お前が言うなだと？

「ちよつ。き、キンジ！あんた私のこと助けなさいよ！」

うわっ。こつちに振るなよ……。あー皆の視線が一気にこちらに。

やるしかないのか……。

「……えつと、俺の名前は遠山キンジです。はい……」

シーン。

な、なんだこのまだ終わりじゃないだろ的な視線は。

く、くそつ。なにか……言うことは……！

俺は一つの決断を下す。

ふう……。と、短く息を吐き、言葉を発する。

「以上です」

ガタタツ!!

おわっ！？椅子から女子が何人が落ちたぞ。

ん？織斑先生も何か呆れている。

何があっただんだ？

そう思った時だった。

「はいっ！質問」

と、女子の声が聞こえてきた。

「な、何ですか？」

やはり女子がほとんどという環境には馴れない。

まあ人一倍馴れないっていうのもあるがなんかこう……居づらい。

「あの、なんで、ニュースで報道されなかったんですか？」

「それは、動かせたのがつい最近でニュースにする間もなかったからです」

他にも質問されたができる限りのことを答え、ようやく俺は解放された。

「さあ、S H Rは終わりだ。諸君らにはこれからI Sの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

え？……何なんだ？この鬼的な教育指導は。

ほら、あそこの男子だって顔ひきつらせてるぞ。

「ほら、早く席に着け、馬鹿共」

先程織斑？が頭を出席簿で叩かれていたのを思いだし、急いで席についた。

「……………」

これは、結構キツイぞ。

一時間目のI S基礎理論授業が終わった休み時間。

けれど、この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。

（あー…つらい）

俺と織斑以外は全員女子。しかもそれはクラスだけではなく学園全体が。

そして、このクラスにしか男子がない。

すると当然――

『ちよつと狭いんだけど！どいて！』

『貴方が退きなさいよ』

なんて感じで廊下に他のクラスの女子や多分他の学年であろう女子達が群がっているわけである。

「はぁ……」

思わず出してしまう溜め息。

マジでキツイぜ。

「な、なあ遠山……先輩？でしたっけ」

そう言つて俺の目の前に現れたのは、織斑だった。

「ああそうだけど、何か用か？」

「いや、用つて訳じゃ無いんですけど。その……こんな環境なんだし、仲良くしたいなあ……と、思つて……」

苦笑いしてそう答える織斑。

そっか、だよなあ……こいつも男。この環境には馴れないよな。

「ああ、そつか、だよな。分かったよ。さっき自己紹介でも、言っておいたが遠山キンジだ。遠山でも、キンジでも好きな方で呼んでくれ。あ、俺は一つ上だけど先輩はつけなくていいぞ。歳が上でもクラスは一緒だしな。その方が呼びやすいだろ？」

「あ、はい。よろしくお願いしますキンジさ……キンジ。えーっと、おれは織斑一夏……です。キンジの呼びたいように呼んでくれ。……んで一応あそこの鬼教官の弟だ」

すこしまだ、敬語の混ざったしゃべり方。まあそんな簡単には使えないよな。年上にため口なんて。

あ、同じ名字だと思ったらそう言うことだったのか。

「わかった。宜しくな、『織斑』」

「こちらこそ、だ『キンジ』」

あ、ついに吹っ切ったらしい。

まあそんな軽い挨拶を交わした後に回りを見ると――。

「フフ腐……織斑君×遠山君……じゅるり」

「……………んじゃ、席に戻るわ」

「おう、んじゃな」

その眩きのせいで俺達の周りの視線が一気に変わり、ちょっと一緒に居ずらくなってしまったので、一旦俺達は別れることにした。

あれ？離れた瞬間誰かが織斑に話しかけた。
。

あのポニーテールの娘だれだろう。

まあ、後で織斑に聞けば良いことか。

俺はそんな疑問を放棄して、残りの休み時間を堪能するために、机に突っ伏した。

「——であるからして、ISの基本的なうんようは現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS を運用した場合は、刑法によって罰せられ——」

すらすらと教科書を読み進めていく山田先生。

結構内容的には難しいが、昨日から予習しておいた甲斐があり、なんとか授業には追い付いていた。

ふと、織斑が気になりちらつと織斑の方を見ると……。

「……………！（ダラダラ）」

うおっ、汗がすごいことになってる。

「お、織斑君。何か分からないことはありますか？」

どうやら山田先生が織斑の様子がおかしいことに気が付いたらしく、
そう織斑に聞いた。

「あ、えっと……」

「いいんですよ。私は先生なんですから聞いてください!」

おお、頼もしいなああの先生。

「分かりました」

織斑も、分からないところを聞らしく顔を上げた。

そして織斑は――。

「ほとんど全部分かりません」

きつぱりと、そう言った。

「え……。ぜ、全部、ですか……?」

さっきまでの自信はいずこへ。

山田先生の顔は困り度百パーセントでひきつった。

「あ、あの………ついでに遠山君は分からない所ありますか?」

「……いえ。昨日から予習しておいたので、何とかついていけてま
す」

俺は素直にそう返す。

「……織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

教室の端から少し怒気を孕んだ声でそう聞く織斑先生。

うおっ…怒った時のアリア並みに怖ええ。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパァン！

「必読と書いてあっただろウ馬鹿者」

……おい。理子が微かに震えている。

笑いを堪えているんだろう、

てか良い音。俺のベレでもここまでの音はでない。いったいどんな腕力してるんだ？

「後で再発行してやる。一週間で覚えてこい」

「いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれ、と言っている」

ギロリ、と織斑を睨む

「……はい、やります」

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。

そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば、必ず事故が起きる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚える。そして守れ。規則とはそう言うものだ」

……正論、だな。

でも、言わせてもらうと俺は別にここにいたくているわけではない。帰れるものなら帰りたいよ、武偵高校じゃなくて普通の日常へ。

「……貴様、『自分は望んでここにいないわけではない』と思ってるな？」

ドクンツ。と心臓が跳ね、前を見るがその言葉はどうやら俺ではなく織斑に向けられているものだった。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

……まあ、言ってることは正しい。

「……………」

「え、えっと、織斑君。分からない所は授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張って？ね？ねっ？」

「あ、はい。じゃあ放課後、宜しくお願いします」

それだけ言って織斑は席についた。

はあ、大丈夫だろうか？

ここでの生活はできれば安泰でいきたい。ここでも硝煙の香りを嗅ぐのはまっぴらだ。

俺はここでは、目立たず^{つまりはネクラ}精神を全うすることをここに決意。

……だがしかし、そんな決意もこのあとあっさり壊れてしまう。

いや、壊れさせてしまう。

俺の平和な、日常は。

似た者同士（後書き）

ああ、ぐたぐた。

ちょっとマジで頑張らせて頂きます

典型的女尊男卑（前書き）

第4話です。

あの後書きには私からして大切な事を書いているのでよかったら見てください！

ではどうぞ！

典型的女尊男卑

「ちょっと、宜しくて？」

「へ？」

「ん？」

二時間目の休み時間。お互いの苦悩を語り合ってた俺達の前に、あの人物が現れた。

そう話し掛けてきたのは、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺たちを見ていた。

あー…ダメだ。こういう女子は何かダメだ。

ほら、いかにも『今の』女子といったオーラを醸し出している。

今の女子は、『IS』のお陰で皆が天狗だ。

女々しい。という非論理的方程式が、今のよのなか適応されてしまっているのだ。

まあ実際、腰にてを当てた様子が随分様になっているようなので本当に偉いかもしれないが。

「聴いてますの？お返事は？」

「いや、聴いてるけど…何の用だ？」

織斑がそう答えると目の前の女子はわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なものですから、それ相応の態度というものがあるのではないのですか？」

「……………」

完全にあつてた。俺も酔狂に探偵科にいた訳ではないらしい。

……………別に嬉しくはないが。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

おう。だよな。もし有名人とかだったらもうちょっとましな対応をしていたよ。俺は。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

……………ごめん、知らない。

「あ、質問いいか？」

と、急に織斑が手を挙げた。

「ふん。下々のものの質問に応えるのも貴族の務めですわ。宜しく

てよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳立てていたであろう女子が何人もずっこけた。

仕方ない。俺も軽くずっこけかけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

おお。すごい剣幕。まあアリアには負けるがな。

「おう。知らん」

さらっとなんと言った織斑。

「あの、なあ？織斑。代表候補生つーのはある程度凄くて頭よくてまあ、部類的には『エリート』な人間になれるものなんだよ。ほら、なんか名前に分かるだろ？」

「そう言われてみればそうだな」

「そう、エリートなのですわっ！」

あ、無駄な事言っちゃったらしい。

ビシッと俺達に向けた人差し指が、鼻に当たりそうな位近かった。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間と同じクラスと言うだけでも幸運なのですわ！その現実を理解していただけます？」

「ふーん？なあ、キンジ。それってどれくらいラッキーなんだ？」

こっちに振るな。まあ――。

「朝の星座占いの一位位じゃないか？ついでに俺は今日一位だった」

「うわっ良いなあ。俺なんて今日――」

「ちょっと聴いてますの！？」

バンツ！と机を叩かれ意識がそちらに向く。

「大体、貴方達みたいなISの知識もろくにない方々がよくこの学園に入れましたね。世界にたった二人の男性IS操縦者と聞いてましたけど、期待外れてしたわ」

む。今のはイラッときたぞ。

「……俺に勝手な期待を抱かれても困るんだけど」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

ほう、これが優しい奴の態度なんだな始めて知った。

「ISの事で分らないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えてさしあげてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

へえー……え？

「なあ、セシリア……さん？それってIS動かして戦うやつか？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あ、それなのか。俺、倒したぞそれ」

「ん、織斑も倒したのか」

「も、つてことはキンジも倒したのか。てか俺の場合は突っ込んできたのを避けただけなんだけどな」

「そうなのか。俺の場合は相手はかなり油断してたからな。油断したところに叩き込んだ」

「貴方達！さつきからわたくしを無視するのを止めなさい」

また強く机を叩き自分の存在を主張するオルコット。正直かなりめんどくさい。

「と、というか教官を倒したんですの貴方達！？」

目をかっぴらいてそう言うオルコット。

そんな驚くことなのか？教官自体本気は出して居なかったしかなり

弱——いや、そうだな。俺はこの頃戦闘馴れしすぎたんだろう。

うわっなんかやだなそれ。

「わ、わたくしただだと聞きましたのに……！」

「女子だけってオチじゃないのか？」

あ、とどめ指した。

「っ、つまり、わたくしだけではないと」

「そういう……事に、なるな」

キンコーンカーンコーン。

そこを割りこむように飛び込んだ音は三時間目の予礼を意味するチャイム。

ふう、助かった。

「っ……！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって!？」

よくない。何て言える空気じゃないだろう。

ほら、織斑だって苦虫を噛み潰したような顔になってるし。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく織斑先生が教壇に立っている。

余程大切な話でもあるんだろうか？

「と、その前に再来週行われるクラス対抗戦にでるクラス代表を決めなければいけないな」

は？なんだって？クラス対抗戦？クラス代表？

「クラス代表者、はそのままの意味だ。普通の学校で言う委員長だ。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年変わらないからそのつもりで」

ざわざわと周りが色めき立つ。

まあ、つまりは戦うためのクラス代表を決めるよってかんじだろ。

OK OK。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

あ、織斑の名前が…。

「あ、私もそれが良いと思います！」

あー…まあ、俺以外がなるんだから良いか。

悪いな織斑。人間、犠牲はつきものだよ。

「わ、わたしはバカキンジを推薦します。あつてもこれはキンジの

力量を試すためであって別に……………」

…………… ちよつと待て。

「私はキーくんがいいと思うなあ」

…………… ん？

「珍しく気が合うね泥棒猫なのに。わたしもキンちゃんが良いと思いますっ！」

…………… んん？

「私もキンジさんを推薦させていただきます」

ちよっ！レキまで！？止めてくれ！俺は普通にしたいんだ！

「ちよっ、ちよつと待ってくれよ！（下さい！）俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも——」

なんとか抗おうとする俺達を甲高い声が遮った。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

また、バンツ！と机を叩いて自己アピール。

何なんだ？机を叩くのが趣味なのだろうか？オルコットは。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんて良い恥さらしです！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

さつきは大人の対応で何とか我慢したが、ここまでくると口が出そうだ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表をするのは必然！それを、物珍しいからという理由で極東の猿——」

と、そこまで言って、オルコットは黙った。

——否、正確には、黙らされた訳だが、
二つの拳銃と一つの刀と一つのドラグノフと一つのナイフによって

「極東の猿——が、なんだってえ？オルオル？」

これは理子。てかオルオルって……。

「私のパートナーを極東の猿扱いする訳じゃないでしょうね？だってら風穴」

でた。伝家の宝刀、『風穴』

「キンちゃんをバカにするなら……殺すよ？」

おおおおい！？ヤバイ。誰か白雪を止めろお！

「この距離なら貴女の心臓と脳を貫くことは可能です」

……一番こいつを止めてくれ。

「ひっ……！ひい」

どうやら腰が抜けてしまったらしい。

まあ、良いきみだ。

「悪いな。オルコット。おい、お前らちょっと流石にそれは……」

そういうと四人は顔を見合わせて、武器を下げた。

「んで思ってたんだが、あんたは俺の事極東の猿扱いをしたがすると目の前に存在する織斑先生も猿扱いしたことになるしI S を作った篠ノ之博士の事を猿扱いしたことになるが」

「うっ……それは……」

そういうと織斑が

「てかイギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い飯で何年覇者だよ」

お、いうなあ織斑も。

改めてオルコットの方を見ると口をパクパクさせている。

水を失った魚の物真似か上手い上手い。

「けっ！決闘ですわ！」

おお決闘とはまた面白いことを。頑張れよ織斑。俺は知らん。

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。な、キンジ」

「頑張れよ織斑」

「いつの間にそんな遠くへ！？てかお前も決闘申し込まれてんだよ！」

知らない。俺はなんも関与してないんだ……！

「言っておきますけど、貴方『達』わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

その言葉を発した瞬間、アリアが鼻で笑った。

「フッ。オルコット。あんた心得ておきなさい。その織斑についてはどうでも良いけど、キンジは——私の奴隷だから無理よ！」

ズビシ！と指をオルコットにむけら犬歯を剥き出しにしてそう言った。

そしてその一言により、

「アリア！貴女まだ『私』のキンちゃんとそんな事を！」

「私のって何よ私のって！いいの！キンジは私の奴隷なの！」

「とかいってえゝアリアちゃんはキンジ君の事があゝ」

「りっ、理子！それ以上言ったら風穴空けるわよ！」

「へえー？空けれるのかなあ？……やってみるよアリア」

いきなり裏理子になった理子がアリアを挑発する。

てかちよっ……！までお前ら！

言わずもがな、やはり武偵校の生徒。

瞬時に武器を出しやがる。

戦ってないのはレキだけ。ってお前も悠長にドラグノフの整備してないで助けるよ。

「貴様ら——」

と、そこに聞こえたのは少し低めのトーンの女の声。

そして背中にビシビシと当たる何かは殺気とは違うがすごい怒気、
と言っても過言じゃないだろう。

パンパンパンパン！

決して銃声ではない。立て続けに三回鳴ったこの音は、織斑先生
のもつ出席簿からなったもの。

ほら、アリアも白雪も理子も涙目になっている。

す、すげえ織斑先生。あの力オスな空気を一瞬で鎮めた……！いや、沈めた。

よし、これからはこういうことになったら織斑先生に電話しよう。そのために電話番号交換しなくては。

ふと、周りを見ると今のやり取りで呆気に取られてしまったらしい。どうしよう。

「……あー！んんっ！では、クラス代表を決めるために織斑、遠山、オルコットで戦ってもらう。最初はオルコットと遠山だ。いいな？」

「んなっ！？そ、そんな俺は——」

「では授業に戻るぞ。神崎、星伽、峰は席にもどれ、では再開する」
俺の話しは完全にスルー。

結局俺は戦う事になったらしい。

あー目立つだろうな……。駄目だ。過去に戻りたい。

そんな俺は現実逃避することしかできず、結局、初IS学園は陰鬱な状態で幕を閉じた。

典型的な女尊男卑（後書き）

えーとですね。

実はキングジのISがまだ決まってる無いですよ。

で、よかったですねですが案やオリジナルISを書いてくれると嬉しいです。

宜しくお願い致します。

どうしてこうなった。(前書き)

すいません！投稿遅れました！

12時に出そつと心掛けて居たのですが……。

今日だけ教師の目が厳しく執筆できませんでした！

そして、サブタイトルについては気にしないで下さい！

では、どうぞ！

どうしてこうなった。

……結局、あれから何にもなく、クラス代表を決める戦いの当日となってしまった。

何？部屋割りの所を端折るなだって？

ハッ。おいおい何言ってるんだよ。

当然、俺と織斑が部屋割りに、

なるはずだったのに……！

「ねえキンジ！私のタオル知らない？」

そう言っ、『部屋』の奥から出てきたのは、アリア。

いやあまでまで。こうなったのは理由があるんだ。

そつだ。あれはオルコットにぶちギレられた日の放課後だったな……。

「はあ……」

放課後。

俺はあの時からの陰鬱な空気を取り払うことは出来ず、窓の外を見てはため息を吐いていた。

ああ、俺もあの鳥みたいに空を飛べたらなあ。

俺の現実逃避レベルは更にアップしていた。

はあ、もうどうしよう。周りからの目もキツいし。

いくら現実逃避しているとはいえそこは武偵。

人の視線とかには敏感なんだ。

ドアの外を見るとバスカービルのメンバーが女子と話しながらこちらをチラチラと見ていた。

ふと気が付けばもう時計の針が4半をさそうとていた。

いかんいかん。もう帰ろうか。

そう思い、机の横に掛けたカバンをとり、席を立つ。

そして部屋を出ようとしたときだった。

「ああ、遠山くん。まだ教室に居たんですね」

「はい？」

呼ばれて顔を上げるとそこには山田先生が書類片手に立っていた。

「あの、何か……用でも？」

そう聞くと、山田先生は

「ああ、はい。えーつとですね。寮の部屋が決まりました」

そう言っただけ渡されたのは、番号のかかれた紙と、何かの鍵。

えーつと。取り合えず、これは……。

「……すみません。あの、俺の部屋ってまだ決まって居ないんじゃないかな」

「そうなんですけど、事情が事情なので、一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……あの、遠山くんはそこら辺のところ、政府から聞いてますか？」

……どうやら政府のやつらは俺らのことを早く檻に閉じ込めたいらしいな。

「そう言うわけで、政府はとにかく寮に入れるのを最優先にしたいらしいです」

そう言うことか。

まあ、そんなことは置いといて。

「あ、あのっ、山田先生。そのっあ、当たってるんですが」

——俺の腕にくっついてる爆弾を放してくれ。

じわっ。と体の芯に血が集まるような
そんな感覚。

ぐう、ヤバい……！ なりかけてやがる……！

あのモードに！

「えっ？ あっ！ すいません！ わ、わざとじゃないんです！ あっ、あと部屋には時間を見て行ってくださいね！ 夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください」

山田先生もどうやら気付いたらしくあと一歩。と言ったところで離してくれた。

た、助かった……！

「あ、きつと分らないと思うのでついてきてください。部屋まで案内します」

山田先生が誤魔化す様にそう提案する。だな、ここで下手に見栄は
つて恥をかくよりはまだましだな。

よし、ここは素直にお願いしよう。

「はい。じゃあお願いします」

そういうと、歩き始めた山田先生の後を着いていった。

廊下をみるとあいつらの姿はない。きっと部屋に行ったんだろう。

はあ、男がいてくれて良かった。
これで俺の苦悩も解放されるぜ。

「あ、ここですね。ではどうぞ」

そう言って道を譲る山田先生。

おお、ここか、中々広そうだな。

横が——寮長部屋？

あれ？なぜ周りに生徒用の部屋が無いのだろう。

——まあいいか。それだけ俺に被害が無いと言っことだ。

そう、奴等は常に爆弾をもって歩いているようなもんだからな。

はあ、と、軽く息を吐き扉のノブを捻る。

カチャリ、と軽い音がなり、ドアが開く。

お、織斑はもう居るのか。

「それにしても遠山くん凄いですね」

「え？何の話ですか？」

そんな軽い言葉を交わしながら扉を徐々 to 開ける。

「え？だって遠山くん——女の子四人と同じ部屋で暮らすなんて
勇気必要だなんて思って」

ガシャン！ガチガチ！（開きかかった扉を一気に閉める音）

「……………どういう事ですか？山田先生」

俺は痛む頭を押さえながらそう山田先生に聞く。

「えっ！？えっ！だって峰さんが…………」

理子おおおお！！

「…………いえ、分かりました。大丈夫です。はい」

俺はその言葉を山田先生に言いながらも自分にも言い聞かせる。

そうだ。大丈夫なんだっ……………！大丈夫なんだっ！

フウウウウ……………！

なが——く息を吐き、閉めた扉を、再度開く。

「あつ、キーくんだあ！お帰りっ！」

……………。

「取り合えず理子。俺は今とてつもなくお前の頭にアイアンクロー

をかましてやりたい気分なんだがどう思う？」

すると理子は急に顔が真っ赤になり、いや、真っ赤にして。

「えっ……だっ駄目だよキーくん。そっ、そんなプレイ……。…でも、キーくんが望むなら……」

まずは黙れ理子。そういうこと言つと……。

「きつ、キンちゃん！ぶっプレイって何！？どんなことをするの！」

「バカキンジ！あ、あんた私の奴隷の癖に他の奴にそういうことするなんてっ！！こっ！このエロキンジ！風穴レンコンにするわよっ」

「キンジさん。別に趣味については何も言いませんが人のいる前ではそう言うことは控えてください」

「いや……おい、理子。お前のせいで取り返しのつかなさそうな所まできてんぞ。ほら」

「いたいっ！悔しいっ！……でも感じちゃう……！」

「キンジイイイイ！」

「なんっつで！！いつもこうなるんだああ！！」

この日、俺の絶叫がIS学園のなかを木霊したらしい。

といった感じた。

なぜか俺は織斑ではなくアリア、理子、白雪、レキといういつもながらのメンバーと同じ部屋になってしまった訳である。

気になったので、あの後、

『何でお前らと同じ部屋にしたんだ？』

と、聞くと、

『え？当たり前でしょ？そんな美味しい『世界初の男性IS操縦者』を一緒にしておいたら更に危険でしょ？だからせめてキーくんだけでもなるべく安全な護衛と一緒に住ませた方が良く決まってる。』

はあ。こいつもこいつで色々考えてんだな。

で、

『本音は？』

『——そっちの方がこれから面白そうだから……ってキーくんいたい痛いっ！あつ頭がつ！そこらめえええ！！』

回想終了。

「ねえ所でキンジ。あんた今日アレよね」

アレ……とは、きっと今日のオルコット戦の事だろう。

「ああ……まあ、な」

俺は兄さんから貰ったバタフライナイフを制服のなかに仕舞う。

『キンジモデル』の俺の愛銃、ベレをホルスターに仕舞い、準備はOK。

後は……。

コンコン。

部屋に響く木を叩く音。ノックだ。

「織斑だけど、入って良いか？」

ん、ここはあいつらも居るし、廊下の方が良いか。

「待ってくれ、今廊下に出る」

そう言つて廊下に出ると、織斑と、……篠ノ之が居た。

「ほら、今日代表決定戦だろ？だから少し話しか聞きたくてな」

「話つて…なんのだ？」

「いや、だから作戦とかの」

「……………あ」

流れる重い沈黙。

「まさか…………キングジ。考えて無かったのか？」

「ああ。すっかり忘れてたな。『そんな事』」

「そんな事ってお前…………。かなり大切なことだと…」

いや、いっちゃ悪いかも知れないが…………。

大したことないだろ。

それが俺の本音。

武偵足るもの油断はするな。とか言うが。

怪物と戦ったり、有名な偉人と戦ったり超能力者と戦ったりすると、
な？分かるだろ？

あまり負けそうな気がしないんだよ

「てか…………あれだよな。この話の前に肝心なこと忘れてたな」

「……………ああ、だな」

そつ。俺達は肝心なことを忘れていた。

実はまだ俺には、

ISが、インフィニット・ストラトスが届いていないのだ。

今日が当日だったのに、一体何やってんだろう？

IS無いと戦えないだろ、どうすんだ？今日。

「まあその時はそのときだな。んで、一夏についてはわかるんだが……篠ノ之さんが何のようで？」

「さんづけはしなくていいぞ、遠山。なに、私は一応お前の応援もしているのな、是非頑張ってほしいと思っただけで……べつ別に一夏といたいからとかそんな理由じゃないんだからなっ！」

あー。そう言うことが。うん。わかった。

「ああ、ありがとう篠ノ之さ……篠ノ之。それじゃあ、俺は腹へったし飯食いに行くわ」

「え？じゃあ一緒に食おうぜ。な、いいだろ？篤」

するとやはり篠ノ之は少しだけ困ったような顔をして。

「……ああ、別に構わない」

「いや良いや。俺はあいつらと食うから」

と、言って後ろの扉を指差す。

「ほら、後から俺達も行くから、先いつてこい」

「……ん。分かった。んじゃまた今度食おうな」

ああ。と、だけ挨拶すると、織斑は背を向けて篠ノ之と歩いていった。

んじゃ俺も、

「おい、アリア飯食いに行くぞ」

「ちよつ。待ちなさいよキンジ！奴隷の癖に命令するなあ！」

「えー？待つてよキーくん？私達もいくよ！ね？レキュにユキちゃん！」

ああああ……不安要素が増えていく……！

……いや、まあ仕方ない。俺はその処理係なのだ。

「んじゃ、飯食いに行くぞ」

カツカツと、靴の音が増えていく。

……一二……三……四人って事は全員きたのか。

はあ、朝から大変そうなおきそうだ。

……まあ飯食ったあともう戦わなきゃならないんだけどな。

どうしようか？相手の戦略、戦い方、間合い、まだ何一つ把握していない。

いや、それが分からなくても普段なら楽に勝てただろう。

しかし、

今回の俺は、ヒスって戦わない。

これは相手にとって大きなアドバンテージになる。

何せ、あれだ。何時ものように、『仲間』が居るわけではない。

いつもは理子やアリア、そして白雪やレキのバックアップがあったからこそ、勝利を掴んでいたが、なあ……。今回一人だしなあ。

だが、まあ……。どうにかなるだろ。今までがそうだったように。

俺はそんな安直な考えを抱きながら、バスカービルのメンバーと共に食堂にむかっていった。

どうしてこうなった。(後書き)

何書きたいのかわらなくなってきました。

なんか友達とかは紙に書いてから書いたりしてるらしいのですが…。

私は基本面倒くさがりなのでそんなことしません(ー、ー)

なんか良い方法無いかなあ……。

そしてクラス代表決定戦（前書き）

今回ぐたぐたです！

そしてクラス代表決定戦

そして遂に、来た。

クラス代表決定戦が。

なのにな。何でだろうな……。

何で……。

「俺のISが届かないんだ……？」

朝も言ったが、俺のISが、まだ届いていない。

クラス代表決定戦の直前になっても、だ。

「どーすんのよ。キンジ」

隣のアリアがそう言う。

「どーするって……言われてもな」

どうしようもないだろ。

「まあでも、来なかったら来なかったで——」

そこまで言ってアリアは銃を取りだし、

「こっちでやればいいわ」

言いワケあるか、と俺が突っ込む前に

「言い訳あるか、馬鹿者」

スパァン！

いつの間にか近くに居た織斑先生の出席簿が火を噴いた。

「お、織斑しえんせい……」

衝撃で舌を嚙んだのか知らないがやけに舌っ足らずなアリアの声。

「遠山、早くしろ。届いた」

届いたのか……って、届いた？

「届いたってまさか……！」

「ソレ以外に何がある。早く行け」

「——ISが、待ってる」

少しだけ緩んだ口元をつぐんで、歩き出す。

俺のISの元へ。

「はっ、早くしてください！遠山君！」

山田先生の完全にテンパった声。

「落ち着いて下さい、山田先生」

「あつ。はいつ。ですよ。深呼吸深呼吸！すーすーすー……」

「取り合えず息吐いて下さい！」

真っ赤を通り越して土色になってきた山田先生を危ぶみ、指摘する。

「けほっ！けほっ！……すいません。はい。大丈夫です！あ、そしてこれが――」

むせた後、山田先生は後ろを向いて何か言おうとしたので、山田先生の目を追った。

「これが遠山君の専用機、『桜華』です」

それは、藍色だった。

とても透き通るような藍色。純粋な藍。

ソレは、俺を受け入れてくれるように、待っていてくれたかのように見えた。

「じつ、時間が無いのでフォーマットとフィッティングは実践です！
て下さい！」

その声を後に俺は吸い込まれるように、近付き、触れる。

「あれ……？」

違う。

あのと時とは、違う。

あのと時のような、電撃が走ったような感じではなく、もっと優しい受け入れるようなそんな感覚。

「背中を預ける様な……そうです。後はシステムが最適化してくれるので」

山田先生の言葉通り、装甲を開いているIS——桜華に身を預ける。

すると開いていた装甲が閉じ、俺の体に合わせられる。

すると桜華からカシュツ…カシュツ…。という空気が抜ける音が響く。

そして、ISが自分に成った。

まるで自分のからだの様な一体感。

解像度を一気に上げたかのような感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。

各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見慣れているかの

ような理解できる。

「ん？」

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特
殊武器あり——。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いてますね！遠山君、気分
は悪くないですか？」

「はい。問題ないです」

手を動かすとISの方も動く。

カシャカシャ鳴る音が『オロチ』に似てんな。

そして後ろにはバスカービルのメンバー。

分かる。そちらを見なくても、俺には360度全方位が見えている。

「アリア」

その声に少しだけビクッ、として

「な、何よ」

「行ってくる。ももまん、一つ寄越せよ」

ソレを聞くとアリアは、

「……いいわよ。ただし、勝ったらね」

んじゃ、勝たなきゃな。

その言葉に首肯で答え、俺はピット・ゲームに進む。かすかに体を傾げるだけで、桜華は浮いた。

ちきちきちきちきちきちき。

クリアーな意識の裏側では桜華が膨大な量の情報を処理している。

そう、今コレは俺の体に合わせて最適化処理を行う、その前段階の初期化を行っているのだ。

今こうしている一秒の間にも、桜華は形を変えていつている。

中身と外見の両方を一斉に書き換えているのだ。扱ってるいる数値は見たことのない数値を示している。

まあ、今はそんなことを考えている暇はない。ゲートが開くまで、もう少ししかないのだから。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがフフンと鼻を鳴らす。

また腰に手を当てたポーズが様になっている。

……。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士の様な

気高さを感じさせる。

さて、ここからどうするか。

「最後のチャンスをあげますわ」

セシリアが腰にを当てたまま、そう俺に告げる。

「……どうせ、泣いて謝るなら」とか、だろ？」

「んなつ！？……前言撤回させていただきますわ。貴方は、泣いて謝っても許しませんわ！」

「

——警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認。初弾エネルギー装填。

キューインッ！

耳をつんざくような音と共に走る閃光。

俺はソレを見て、避ける。

と、思えたが

ガウンッ！

「おわっ！」

——バリアー貫通、ダメージ46。シールドエネルギー残量、52

1。機体ダメージ、レベル低。

避けられなかった。その理由

(……俺が、コイツに追い付けていない)

大雑把にいうとISバトルはシールドエネルギーをゼロにしてしまえば勝ち。

だが、今のようにバリアー貫通をされてしまうと実体がダメージを受ける。

そしてそのダメージはその後の戦闘に大なり小なり影響を与えることになる。

「さあ、踊りなさいつ。わたくし、セシリア・オルコットの奏でる円舞曲で！」

「俺はんなもん踊れねーよ！」

良いながら何とか、かわす、かわすかわす。

「てか装備だよ装備！」

そう言うときさまに現在展開可能な装備一覧が現れる。——一覧？

そこにあっしたのは、

「……コレ……か。まあ、出来ない事はないな」

俺は呼吸を整える。

「なによそ見して居ますの!？」

そう言っ^てオルコツトは、また撃^つてきた。

そして、俺に当^たる直前に――。

パシユ。

消えた。

「え？」

オルコツトが、何があ^つたのか分^からない。といった感^{かん}じで声^{こゑ}をあ^あげる。

当たり前だ。

コレは俺^{おれ}が必死^{ひっし}に練習^{れんしゅう}した『不可視^{ふかしかん}の銃弾^{じゅうだん}』。

ヒステリアモードじゃなくても使^{つか}えるようにならないと駄目^{だめ}だと思^{おも}い、ようやく手^てに入^いれた力^{ちから}だ。

アリア達^{アリアたち}には見^みえてるだろ^うが、あまり経験^{けいけん}の無^ない者^{もの}には見^みえないはず。

「あつ。貴方^{あなた}いつたい何を……!」

「いや、言^いつてもきつと分^わからないと思^{おも}つぞ?」

俺^{おれ}が軽^{かろ}い調子^{てうし}でそう言^いつ。

「なっ！？貴方！この期に及んでまだ私を侮辱するつもりですの！？」

おおっと。相変わらず沸点が低い。

それからセシリアがブルー・ティアーズの特殊レーザー4つの猛攻撃が始まった。

「——につ……。二十七分。持った方ですわねっ……。！誉めて差し上げますわ……！」

途切れ途切れの言葉使いでまだ強がりというオルコット。

ああ。確かに凄いよ。流石は代表候補生。ただその名をもっている訳ではないらしい。

判断能力。攻撃までのモーション。それらは素人のソレではなかった。

伊達に威張っているわけではない。

ただ、

俺の近くにもっとも偉そうで偉い馬鹿がいるけど、

「あいつはもつと凄いぜ？」

そう言つて俺は『不可視の銃弾』を再度放つ。

今度は相手の機体に直撃し、シールド貫通。

しばらくはまともに動けない筈。

「じゃ、終わらせるぞ」

俺はそう言い武器を構える。

しかしその時、オルコットが笑つた。

「それはっ」

「こっちの台詞ですわっ！」

その言葉の後に俺は気付いた。

あのBT兵器は、

4つだけじゃないっ！

しかし時すでに遅し。

BT兵器から放たれるビームで、俺は爆炎に包まれた。

そしてクラス代表決定戦（後書き）

次でセシリア戦は終わらせたいですね！

ではまた次回！

そうして……（前書き）

どうも……。チキン執事です。

昨日は熱出しちゃって更新できませんでした。

まだ熱自体は引いてないのですが、学校休んで暇なので。

今回。いつもより少ないです。

では、どうぞ！

そうして……

アリア side

キンジとあの代表候補生のクラス代表決定戦。

の一回戦。

「それはっ」

先程まで完全に不利な状況まで追い込まれていた筈のセシリアが、
笑顔を見せた。

それは貴族の様な上品な笑みではなく、野蛮な戦士が見せるソレだった。

「こっちの台詞ですわっ！」

その言葉を最後にキンジは爆炎に包まれた。

「あんのバカキンジ……！」

あそこで油断するからそうなる。

そう、多分キンジは『負ける筈は無い』
そう考えて居ただろう。

その見立ては間違いではない。

私や理子、それに白雪も、同じことを考えているでしょう。

——キンジがミスをしないうり。

そう、ミス。

ミスとはいうのは大きな物から小さな物まであるだろうが、私達、『武偵』にはその大きさについては問題はない。

ミス。つまりは隙が生まれるわけである。

『隙』とは、相手の判断が遅れたり、鈍る。

その判断が遅れた時に、間合いにはいられたら？

多分、流石のキンジでも、怪我を負う。

……『あのキンジ』なら話は別だけど。

私も武偵成り立ての頃、そんな考えは確かにあった。

私は過去に一度も犯人を逃したことがない。いや、一度だけ合ったか？いいや、最近では多く逃している気がする。

お祖父様。理子。……そして、キンジ。

まあ、それは置いといて、前までは逃した事がなかった。

しかし、全部が全部楽に。と言うわけにはいかなかった。

中にはどこから手に入れたのか分からないがまだ軽く未完成なステルス迷彩の服を着ていた犯人だって存在した。

そう、油断は大敵。

気弱そうな奴でもやるときは殺るし、小さな虫でも強力な毒を持っていることだつてある。

今回キンジは、見事にその穴にはまってしまったわけ。

あーあ。

でも、まあ。

「重要なのはこれからね」

ボソッ。と、言ったこの一言は、周りの女子の喧騒に埋もれ、誰にも届くことはなかった。

キンジ s i d e

終わる筈だった試合。

笑ったセシリア。

その瞬間走った閃光。

そして、爆炎が俺を包み込んだ。

俺を取り巻く、土煙が、晴れていく。

身体に感じる浮遊感。これは……ISの中。

あれ……？俺今負けなかったっけ？

少しだけ、混乱する。

すると、ブォン！という音になり、俺を取り巻く土煙が逃げるように消えていく、

そしてまず視界に入ったのは、桜華。

……なのか？

何故疑問系？と思うかもしれないが、アレだ。

見た目がなんか変わっている。ちょっとびっくりだ。

いや、桜華、というのは分かるんだが……なあ。

なんていうんだろう……。

なんかポニーテールをいつもしている女の子が急に髪型を大胆に変えたりしたら、分かるんだけど……聞いちゃう。見たいな感じの奴だ。

まず何で形が変わったんだ……？

何て考えていると、

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

フォーマットとフィッティング、つまりそれは

「一次移行……か」

それを改めて確認した瞬間、また、新しいデータが直接脳内に送られてきた。

——いや、正確には整理されている。

そしてそれは、劇的に現れた。

「うおっ……これは……」

新しく形成されたIS装甲は、先程より強靱に強力になったように感じられる。

「ま、まさか……一次移行！？あ、あなた！今まで初期設定で戦っていたと言うの！？」

そうか、これでこの機体は

『俺のもの』になったわけか。

そして、変わったものといえはもうひとつある。

武器だ。

俺の手には先程の銃は握られていなかった。

そう、先程の銃は。

代わりに握られていたのは、

なんだ？……これ？

いや、銃というのは理解できるが……。

見たことがないような形だ。

するとまた、情報が脳内に流れてきた。

——中距離武器『白桜』

あ、分かる。解る。判る。この情報が流れてきた瞬間、まるで桜華を始めて触ったときのような感覚に襲われた。

そして、

俺は構えた。

目の前の敵に向かって。

悪いな、オルコット。

俺、まだもまん食ってないからな。

負けるわけにはいかないんだ。

放つ。

キュイン。

甲高い音を奏でながら一直線に相手に向かっていく銃弾。

キュインキュイン。

また、もう二発。

そして、

キュイン…キュイン…キュインキュインキュインキュイン
キュインキュインキュインキュインキュインキュインキュ
インキュインキュインキュインキュインキュインキュイン
キュインキュインキュインキュインキュインキュインツ！

放つ、放つ放つ放つ放つ放つ放つ放つ。

とにかく放つ。

流石にこれはオルコットにも避けられない。

案の定、俺の銃弾はオルコットのシールドエネルギーをだんだんと減らしていつている。

そして、その無数の銃弾は——まるで。

アリア side

勝てる。私は確信した。

この勝てるというのは、別に確率的にじゃない。

信頼。経験。何より、キンジだから。

あのバカはバカな所でミスをして、いつも最後は勝っちゃっような奴。

そして、今。あのバカはあの代表候補生を今、圧倒している。

あいつの銃から出ている輝く白に薄いピンクの混じった無数の銃弾は、まるで。

「桜……みたい」

誰かが漏らしたその言葉。

フンツ。まあ、

「流石は私のパートナーなだけはあるじゃない」

歌うような悲鳴を奏でながら。

「この桜吹雪っ……！散らせるものなら……散らせてみやがれっ……！」

そして。

ブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者——遠山キンジ』

俺とセシリアの戦いは、俺の勝利で幕を閉じた。

そうして……（後書き）

かなり今回意味不明な描写が多かったと思います。

本当、戦闘描写が苦手なんですよね。

それにしても『桜華』の設定をどうしたものか。

なんか、皆さんの作品を参考に使用としても皆……。

えー、そこまで書きちゃうの……？

つてなるぐらい詳しくてビックリしてます。

はあ、本当にどうしたもんか。

現れたのは（前書き）

すみません！授業中にケータイで執筆してたところ見つかり奪われていた為、執筆出来ませんでした！

と、言うことでいつもよりかなりおおめにしました！

2つ分ぐらいあるのでお許しをっ！

と、いうわけでどうぞぞー！

現れたのは

翌日、朝のSHR。

「では、一年一組代表は遠山キンジ君に決定です!」

山田先生は嬉々として話している。

そしてクラス的女子やアリアやあの無表情のレキでさえ顔を綻ばせていた。

暗いのは、俺だけだった。

俺、一人だけだった。

「せ、先生。今から代表を変えることなどは……?」

「無理に決まっているだろう。馬鹿者」

ですよね。わかってます。

てか急に話に入ってこないでほしい。
本当にビックリするから。

「ならそんな当たり前の事を聞くな」

……いや、普通に心読まんでください。

はあ、何で俺織斑と戦ったとき勝っちゃったんだろう。

用は、手加減を忘れた。

今まで、死闘を繰り広げすぎたせいで、戦いに対して余裕というか手加減が完全になくなっていることに気づいた。

まあ、手加減を忘れた俺が負けるわけもなく、織斑に勝ってしまったと。

やばい。マジでどうしよう。

？皆の期待に応える

？二人ともに勝っちゃったんだし全力で挑む。

……なんだこの『yes』と『はい』しかない選択肢。

「遠山。言っておくがお前に逃げ道はないぞ」

止めを指すような織斑先生の言葉。

この人もう武偵になれば？蘭豹までくらいなら倒せそうだ。

「……クラス代表は遠山キンジ。異存はないな」

はい。

と、俺を除く皆がにこやかな笑顔で返事をした。

あ、今の織斑の笑顔腹立った。制裁を加えておこつ。

いや、待て。そう言えばどこぞのイギリス代表様は男である俺が代表になることに關してとても嫌悪感を抱いていたはず。

罵詈雑言を言われるのをなんとか我慢すれば俺にも活路がみえてくるかもしれない……！

「あ、あの……すいません？オルコットさん？えーっと……俺が代表になるのは大変迷惑では……？」

「何をいつてるんですの！？」

バンツ！！いつも通りに机を叩くオルコット。

うん。よし、心の壁展開。これで俺も罵詈雑言に耐えられる。

「私に勝った“キンジさん”が代表をやるのは当たり前前の事ですわ！」

あれ？なんだこの……知らない人。

おかしいぞ。あの純度100%の女尊男卑の縦ロールはいずこへ？

「この代表候補生である私に勝ったんですの！そのエリートを越えたキンジさんはとても（ry」

うわっ。なんだかわからんが次は俺の話をしているらしい。

できればやめてくれ。アリアと白雪の視線で今俺は死ねそうだ。

てかいつの間にこいつは変わったんだ？

まあ……これからは少なくとも仲良く接することが出来るかもな。

「所で……オルコットさん？あの、じゃあ貴女は俺が代表になることを承諾すると……？」

「当たり前ではありませんか！それとキンジさん！わたくしの事はオルコットではなくセシリアとお呼びください！」

うつわ。今の一言でアリアがガバメントを、白雪が長刀を抜き始めた。

ついでに理子は……寝てやる。

やめてくれ。ここはあの頭のおかしい高校でもねえのに何でそんな物を抜くんだろう？

ああ、あいつらも十分頭がおかしいからか。納得だよ。

そうして結局、アリアが俺に風穴攻撃を、そしてそれを見た白雪がターゲットをセシリアからアリアに。

最後には、織斑先生の出席簿が火を吹き、一気に鎮圧された。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらつ。遠山、織斑、オルコット。ためしに飛んで見せろ」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃、俺は織斑先生の授業を熱心に聞いていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開に一秒もかからないぞ」

そんな人たちと比べないで下さい。

なんて言葉は意味はない。

今更だがここは武偵高校並に……いや、もしかしたらそれ以上に頭のおかしい高校だ。

だつてさ……いや、これ以上言うまい。

これで俺の胃に穴が開いたらどうしてくれるんだろう？
よし、そうなったら訴えてやる。

「そんなこと考えて無いで早く展開しろ馬鹿者」

パン！

え？何？なんか痛みを越えてスースーするんですが。これ。

てか始めて叩かれた。

織斑はこんな痛みを一日四回以上味わってるのか。

なんか織斑の苦勞がわかった気がした。

なんて考えていたらまた出席簿アタックをされてしまうから俺はゆ

びにある指輪を握り締め、意識を集中した。

俺の指に着いている指輪とは『桜華』。

どうやら一度フィッティングしたらその操縦者のアクセサリーになつて、待機状態になるらしい。
なんとも楽だな。

つといかん。集中……集中！

指輪を嵌めた方の手を、額のところまで持つていく。

これが俺のIS展開が一番しやすいポーズ。

カッコつけとかそう言うのじゃなくてなんかこれが一番集中しやすいんだ。

(……来い、桜華)

そう呟く。刹那、指輪がはまっていた左手が光の粒子に包まれその後から全身がその粒子に包まれていく。

ふわりと身体が軽くなり、一度目を閉じて開く頃には、俺の身体は装甲に包まれていた。

「よし、飛べ」

その言葉を後に、俺は空に飛び上がった。

織斑曰く、『空を飛ぶイメージなんて分かん』

らしいが、俺はアリアと白雪のせいで何度もベランダからのダイブ

をしてきたお陰でなんだか感覚を掴みやすかった。

今だけは感謝しといてやるよ。今だけはな。

ISの機能で飛躍的に視力が上がった俺は米粒レベルになったアリアの表情を見る。

なんとも満足げな表情だな。

言い表すと「よくやったわねキンジ。そういうキンジはいいキンジ」
って感じた。

「あ、あのキンジさん。もしよかったらこれから一緒にISの練習
など一緒にどうですか？」

気が付くといつの間にかセシリアがとなりにおいてそんな提案を持ち
掛けられた。

ふむ……。練習か、確かに。この前は偶然勝てたが次は勝てるとは
限らない。

よし、ここは受けるかな。

「ああ。じゃあセシリア。放課後とかでいいか？」

それをいうとセシリアの顔がパアアア！と明るくなり、

「はい！喜んで！」

と、言ってくれた。はあ、良いもんだな。普通の女子って。

……普通かどうかはわからんが。

「織斑、遠山、オルコット、急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表から十センチだ」

「

と、下からは織斑先生の声が届いた。

十センチって……。出来んのか？

取り合えず俺はセシリアの後に続き、桜華で急降下した。

ふう……。何とか行けそうだ「うわあああ！キンジい！どけてくれえええええ！」……。え？

ふと、上を見るとそこには、いや、眼前には誰かの頭。

ガゴンッ！

そんな鈍い音の後、

ギユンッ——ズドオオンッ！！！！

織斑と仲良く墜落した。

「……………う、う？」

回りの砂煙が晴れていく。

俺のからだ動きにくい、つまり、俺の身体の上に織斑の身体が乗っかっているらしい。

ぐううう……こいつのせいでこの土煙が晴れた後笑われるんだろうな。

しかし、土煙が晴れた後、待っていた反応は別のものだった。

「キヤアアアアア！」

え？なんで皆そんな黄色い声をあげるんだ？

と、聞こうと思って俺の上にいる織斑を起こそうとした――

ら、皆が黄色い声をあげている理由が分かった。

「……………おい織斑。取り合えず俺の上から降りてくれ」

そつ。今織斑は俺の上に馬乗りして居るのだ。

「え？ああ悪い、重かったよな」

意味を理解していないらしい織斑がそう判断して俺の上から降りる。

違っんだ……違っんだよ織斑！

見てくれこの回りからの腐った視線を。

もうだめだ、この後から俺には、『女つたらし』『昼行灯』そして新たに『男色家』という不名誉なレッテルが貼られることだろう。

俺は溜め息を吐きながら、ISを解除する。

ついでに織斑は先生に怒られている。

ちょっとスッキリした、と言つのは黙っておこう。

「織斑、お前はその穴を後で埋めておけよ。よし、じゃあ次は武装を展開しろ、それぐらいは出来るだろう?」

「は、はあ……」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始める」

そう言われた織斑は、正面に人が居ないことを確認してから、織斑は腕を突きだし右腕を左手で握った。

すると、織斑の手に光が灯り、それが形を成していく。

そして光が収まる頃には、白い剣、名は《雪片弐型》が握られていた。

（織斑は完全に出せるのか……）

思ったが織斑はきつと潜在能力的なものがあるんだろう。

予想以上に飲み込みが良い。

いや、飲み込みがいいというか、ここぞと言うときに凄いことをや
つてのける。

実は俺との戦いの時も、最後の最後にイグニッションブーストを使
われて、ダメージを負ったり。

流石は世界王者の弟、なだけはある。

「遅い、0.5秒で出せるようになれ。じゃあ次は遠山、お前がや
れ」

俺はホルスターから抜き取るような動作で腕を動かす。

そして俺の手には、銃が握られていた。

「……0.3…ま、まあ中々だな」

お、おう。ちよつと自分でもビックリした。

なんか『不可視の銃弾』を練習してから、出すのが早くなったな。

「ンンッ！……じゃあ次はオルコット。貴様がやれ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。そして織斑のよう

に光の奔流が放出されるようではなく、一瞬爆発的に光っただけで武装は展開されていた。

そして銃器はマガジンに接続されていてセシリアが視線を送るとセーフティが外れた。

一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「流石は代表候補生だな。——ただし、そのポーズは止める。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面で展開出来るようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な——」

「直せ、いいな」

「——、……はい」

かなり不承不承といった感じの応答。まあ、仕方ない。相手は織斑先生。反論の余地はあっても無いに等しい。

「セシリア、近接武器を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

きつと頭の中で文句を言っていたんだろう。

いきなり振られて会話にビックリして反応が鈍っている。

「……………くっ」

「まだか」

「す、すぐです……。——ああもう《インターセプター》！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に叫ぶ。

これは教科書の冒頭に載っている言わば、『初心者用の』展開の仕方。

「……何秒かかっている。お前は相手に待って貰うのか？」

「じ、実践では近接の間合いには入らせません！ですから、問題はありません！」

「ほう。遠山との戦いでは間合いに入られなくても負けていた気がするが」

「あ、あれは、その……」

ゴニョゴニョとまごついて、セシリアの言葉の歯切れが悪い。

織斑とそうすを何の気無しにそうすを見ていたら、キッと睨まれた。

そして送られて来たのはセシリアからの個人間秘匿通信。

『貴方のせいですわよ！』

何でだよ

『あ、あなたがわたくしに勝つから……』

何という傍若無人な台詞なんだ……！

『と、とにかく責任をとっていただきますわよ！』

……何のだよ。

何て言う台詞は心のなかで留めておく。

言った所でどうせ面倒臭い事にしかない。

俺はそれをアリアたちとの暮らして学んだんだ。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

織斑が「忘れてなかったか……」と凹む。

俺はそんな織斑を見て、

「織斑……」

「キンジ……まさかお前……！」

ああ、と俺はかぶりを振って答えた。

「教室の窓から応援でもしてやるよ」

「この鬼イ！」

おう、何とでもいえ。俺は面倒臭い事は嫌いなんだ。

てか元々自業自得だよな……？

俺は織斑を見捨て、普通に教室に戻っていった。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な身体には不釣り合いなボストンバックをもった少女が立っていた。

まだ、暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。肩にかかるかからない位の髪は、金色の留め金がよく似合う艶やかな黒髪をしていた。

「えーと、受付って何処だっけ」

そう言い彼女は胸ポケットからくしゃくしゃな紙を一枚取り出した。それはお世辞にも綺麗とは言えなくて、その紙を見るに彼女の性格はとても大雑把な様だ。

「本校舎一階総合事務受付……ってそれをどこにあるか聞いてんでしょ」

そんな突っ込みも虚しく、そんな言葉は夜の風に流されていく。

少女は舌打ちをひとつし、紙をまた、胸ポケットの中にねじ込む。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも、足は動かす。

——ったく。出迎えはないって聞いたけどさあ、幾らなんでも不親切過ぎない？ 仮にも私、『中国の代表候補生』なのよ？

政府の奴等だって異国に十五の女放り込むとか何か思うところないわけ？

少女は、日本人と似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさは中国人のそれだった。

とはいえ、この少女にとっては日本は第二の故郷であり、思い出……いや、思い人のいる場所でもある。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内人とか）

それがいたらきつと少女はここまで苦労しなかっただろう。

（あーもー、面倒臭いなー。空とんで探そうかな……）

一瞬名案だと思った彼女だが、やめた。

あの『アナタの街の電話帳』三冊分の厚さのあの学園内重要規約書を思い出したのだ。

まだ転入の手続きが終わってない中、ISを起動させようものなら、事である。

最悪、外交問題にも発展しかねない。

それだけは頼むから勘弁してくれ、と言ってペコペコと頭を下げる

大人の姿を思い出すと、少し気が晴れた。

（ふっふーん。まあね。私重要人物だもんねー。自重しないとねー）

正直言つて、自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げる様は、ちょっと自分でも気分がいい。

昔から『年食つてるだけで偉そうにしてるやつ』が大嫌いな彼女にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は兎戯、女のISこそ正義。それもまた気分がいい。少女はかつて、『男というだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子供だった。

——でも、アイツは違ったなあ。

とある男子のことを思い出す。

と、いうか今はその男子のことで頭がいっぱいだ。理由は簡単。

それこそが彼女がここにいる理由だからだ。

「だから……でだな……」

そんなことを半ばニヤケ顔で考えていると女の声が聴こえてきた。良かった。そう思った瞬間だった。

「だから、そのイメージがよく分らないんだよ」

ふいを突かれて、少女はびくんと震えてその足が止まる。

男の声——それも、知っている声にすごいよく似ている。いや、多分70%の確率でそうだろう。

予期しなかった再会に、少女の鼓動が急ピッチでペースを上げる。

——あたしってわかるかな？わかるよね。一年ちょっと会わなかっただけだし——でもし……いや！それはそれであたしが綺麗になったからよね！うん！

超ポジティブ思考にスイッチを入れて、少女は再び歩みを再開する。

「いちっ——」

ああああ！どうしよう声裏返っちゃった！意識してるって思われる！！恥ずかしいなあ！

だが、そんな乙女な考えは一瞬に無くなった。

「一夏、いつになったらイメージを掴めるんだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特過ぎんだよ。なんだよ『くいつて感じ』って」

「……くいつて感じだ」

「だからそれが分からな——っておい！待てよ第！」

すたすたと足を速める女子に、男子が追いかけていく。

——誰？あの女の子。何であんな親しそうなの？っていうかなんで名前で読んでんの？

さつきまでの胸の高まりは嘘のように消え、そこにあつたのはとても冷えきった黒い感情だった。

それからすぐ、総合事務受付は見つかった。

アリーナの後ろにあるのが本校舎だったからだ。明かりがついていたから、そこだと分かった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、凰鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあつて意識に届かない。少女——鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに口を尖らせていた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。お隣ね。そうそう、そう言えばあのクラスは二人も男の子が居たわよね。たしかクラス代表になったのはそっちの子だったはずよ。スゴかったわね。あの男の子と男の子の戦い」

噂好きは女性の性なんだな、と改めて知りながら、少女は新たな感情を抱いていた。

あたしの思い人を——一夏を倒したそいつを見たい。いや、それだけじゃない。

——闘いたい。

そんな好戦的な気持ちを代弁するかのごとく、可愛いげのある犬歯が口から覗いた。

しかし、そうそう戦うことなんて出来ないだろう。

だからとる方法はただひとつ。

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の対応に少しおかしいなところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに変わってって——」

につこりとした笑顔には、もう先程の感情は宿って居なかった。

現れたのは（後書き）

うわー…こっからどうしましょ。

まあ頑張ってみます！

クラス代表就任パーティー（前書き）

ようやくの投稿！

今回は結構スランプ気味なので変なところも多いと思います。

クラス代表就任パーティー

「というわけでっ！遠山くんクラス代表決定おめでとう！」

パンパン！とクラッカーが乱射される。

ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自手にはお菓子やら飲み物をもってやいのやいのとさわいでいる。

「……………」

めでたくない。ちつともめでたくないぞ。何なんだこのパーティー。そう思い壁の方に目を向けるとそこにはでかでかと『遠山キンジクラス代表就任パーティー』とかがかれていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

というか思ったんだがこの人数明らかに多くないか？少なくとも四クラス分ぐらいあるんじゃないか……。

「人気者なのね、キンジ」

「……なわけあるか」

知ってるか？今ほとんどのじょしがラフな格好してるせいで俺からしては地獄にしか見えないことを。

「はいはい！新聞部です。話題の新生。織斑一夏さんと、クラス代表に就任した遠山キンジに特別インタビューをしに来ましたー！」

オーと一同盛り上がる。オーじゃねえんだよ。オーじゃ。

「あ、私は黛薫子。宜しくね。新聞部副部長やっています。これ、名刺ね」

「ではまず織斑くん！ここ、IS学園に入った感想はどうですか？」

「へっ！？……えっと……まあ、はい。みんな優しいので何とかやっていけてます」

「そうですか。では次にどうしてここに来たんですか？」

「藍越学園とIS学園を間違えたからです」

おい、そこをキツパリと言っな。

「……あー。はい、ありがとうございました。では！次にクラス代表の遠山キンジくん！ここにきた理由は何ですか？」

「えーとですね。ISの護衛をバスカービル……いや、アリアと理子とレキと白雪とワトソンでやってたら間違ってISに触れちゃっ

て……」

「ん？という事はアリアちゃんと白雪ちゃんと理子ちゃんとレキちゃんとは元々の知り合いだと？」

「あー……まあ」

いうんじゃないかった。俺の予感が正しければこのあとカオスな展開がありそうな……。

「んー。じゃあ、それぞれとの出会いは？」

一番やめてほしい質問きたー！ー！。

「えつと……それは「私とキンジのつてたしかチャリジャックよね」……ああ」

「チャリジャック？」

「はい。バスに乗り遅れたんでチャリで行こうと思ったらチャリに爆弾仕掛けられてることが分かって徐々にスピードを上げないと爆発するっていうやつです」

それを聞いて、みんな啞然とする。

「しかも回りにはセグウェイに取り付けられたUZIに追い回され変な行動ひとつとれば……っていう奴ですね」

それを聞いて、更に啞然とする。

「えっ。えつとだ、大丈夫だったの？」

「はい。何とか」

「とか言つてえゝ。キーくんアリアに助けてもらつてたクセにゝ」

「うっせ。仕方ないだろ」

「そんなんで死なれたらがおーだぞ！」

そういつて理子は指でぴき、と角を作った。

てかやつたのお前だよな？

「あ、はい。じゃあ最後にクラス代表になつた感想をどうぞ」

「えー……まあ、頑張ります」

「えー？もつといい台詞頂戴よゝ。俺に触れるとやけどするぜ！とか」

偉く前時代的な台詞だな。

「えーじゃあ『この桜吹雪散らせれるものなら散らせてみやがれ』で」

「うわ、前時代的！」

なんだって、俺のご先祖様の名言だぞ。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」

どこが良いのか全くわからない。

「ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね」

とか言いつつ、髪の毛のロールはいつもより少し大きくかかってたりとても気合いが入っていないとは思えないんだが。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと――」

「ああ、長くなりそうだから良いや。写真だけちょうだい」

「話を最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、遠山くんに惚れたからにしておこう」

「なっ、な、ななっ……！？」

ボツと赤くなるセシリア。おっ。今の赤面速度はなかなか早い。アリアには遠く及ばないが。まあ、アリアの場合、十中八九赤くなつた後風穴攻撃が飛んでくるからまだましか。

「そんなことがあるわけないだろ。なあ、セシリア」

「えっ！？あの、その、うううう……」

やば、不覚にも可愛いと思ってしまった。
一瞬だけがヒステリアの血流を感じたぞ。
というか違うなら違うつていえよ。勘違いされるぞ。

「はいはい、とりあえず二人ならんでね。写真とるから」

「えっ？」

意外そうなセシリアの声。

「注目の専用器持ちだからねー。ツーショットでいくよ。あ、握手してね」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

何故かモジモジと始めたセシリアはチラチラとこちらの様子を伺っている。

なんだこの、『チャンス到来！でも安くみられないように気を付けよ』的な雰囲気。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね」

「そりゃね」

「でしたら今すぐ着替えて……」

「時間かかるから駄目。はい、さっさと並ぶ」

そういつて俺達の手を取り握手させられる。

「……………」

「?どうした?」

「別に何でもありませんわ」

じゃあジロジロこっちを見るな。俺は見せ物じゃないぞ。

「」「」「……………」

前々から何だがセシリアの視線よりバスカービルのじと目の方が結構気になる。

「なあ、お前らも何なんだよ」

「べつつにー」「え?いや…………その」「何でもないわよ。このバカキンジ!」「……………」

こつちをジロジロ以下同文。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は?」

「…………えつと、2?」

「ぶー、74・375でしたー」

歯切れ悪っ。

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。……ん？

「何で皆入ってるんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの回りに終結していた。入ってないのは織斑と篠ノ之だけである。

「あ、あなた達ねえ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょ」

「クラスの思い出っでことで」

「ねー」

クラスメイト達に丸め込まれてしまっセシリア。

「うつ……ぐう……！」

苦虫を噛み潰したような表情をしているセシリアを皆はニヤニヤと見ている。

何があっただんだ？

なにがともあれ、この『遠山キンジクラス代表就任パーティ』は10時過ぎまで続いた。

周りの視線やアリア達の視線によってメンタル面の消耗が激しかった俺は終わるや否やでベッドに潜り込みさっさと寝ることにした。

三人称 side

「アリア、間違いないんだね？」

奴隷2号（白雪）のいつになく真剣な声。

「うん。さっき綴先生から連絡が入った」

この話は、あのISを護衛していたときの話。

実はあの後、綴先生に頼み、あの襲撃犯達がどこの組織のものか尋問してもらったことにした。

そして先刻、ようやく犯人は吐いたらしい。

それが――

「ファントムタスク
亡国企業よ」

「ファントムタスク？」

理子がわざとらしく首をかしげる。

「ファントムタスクってのはまあ私もよくわからないんだけど、ど

「やら」

「私の中の殻金持ってるらしいのよ」

その言葉にみんながピクリと反応した。

「皆にはもう話したわよね。私の中の緋緋色金の事を」

まあ、白雪は私より知ってるんだけどね、と付け足す。

「それで、聞いたところファントムタスクはISの『コア』を狙っているらしいわ」

コア、それはISを動かす上で一番必要なもの。

しかし、それは作れない。

いや、作ってくれないのだ。

ISの開発者、篠ノ之東博士が。

ISのこのなかは完全なるブラックボックスで篠ノ之博士以外誰にも作れない。

だから、『ファントムタスク』はそれを狙ってきた。

IS学園にあるISを。

「しかも、今ここには『世界に二人しかいない男のIS操縦者』がいる。つまり――」

「そいつら捕まえて殻金取り戻せば良いのよっ!!」

シーン。

そこに聞こえるのは、キンジの寝息だけ。

「えーっと……アリア？その……捕まえる上での方法は？」

流石の理子も軽く顔をひきつらせながらアリアにそう聞くと、

「作戦？なにそれ。バツとやって普通に捕まえれば良いじゃない」

それを聞いた瞬間、皆はまた黙り、一拍置いて溜め息を吐いた。

「はぁ……。アリア？そんなことで捕まえられるの？」

白雪が溜め息混じりでそう聞く。

「ん？私今まで作戦なんてあまり立てたこと無いわよ」

皆はそれを聞いて、確かにと思った。

デュランダル——つまり、ジャンヌの時、

ブラドの時は作戦は立てたものの意味がなく、結局は作戦なんてものはなかった。

「だから、お願い。今回は私を信じて、力を貸して」

アリアの真っ直ぐな視線。

皆は顔を見合わせ頷き、

「くふふっ……アリアに死なれても困るし。いいよ、でもあんたを殺すのは理子だからね」

「……私は星伽に身を置くものとしてやらなければいけないことだから。手伝うよ。アリア」

「……アリアさんは『友達』なので、手伝わせていただきます」

「……………ありがとう」

アリアは今更ながら真っ赤な顔をうつむかせ、そう言った。

そんなアリアを見ながら笑い合う姿は、どこからどう見ても、

『普通の女の子』だった。

クラス代表就任パーティー（後書き）

なんだこのおわりかた？

いや、考え付かなかったんですよ。

すいません。

とにかくまた次話でお会いしましょう！

セカンド幼馴染み（前書き）

おはようございます！

最近リアルなスランプのチキンでございます！

……どうしょ。

今回ちょっと書き方を変えて書いたので読みにくいかもしれません。
前の方がよかった。という方は感想とかに書き込んでくださいね！
ではどうぞ！

セカンド幼馴染み

「お早うキンジ」

朝。席につくなり、寄ってきた織斑がそう声を掛けてきた。

「ああ、お早う織斑」

こんな普通の日常風景。廻りの女子の人口密度の高さは流石に頭痛もんだがこういう普通の朝の挨拶を交わしていると、ここにきてよかったと、少しだけ感じる。

何てったって今日は朝っぱらから硝煙の匂いを嗅ぐことになったかな。

「なあなあ、ところで聞いたか？」

突然。織斑が話を振ってくる。

「何をだ？」

俺はなににも聞いていないため、織斑から情報を聞き出そうとそう聞く、

「やっぱ知らなかったか。……まあ俺もさっき知った身だからなんとも言えないんだけどな。んで、その話なんだけど——キンジ達以外にも転入生が来るらしいぞ？」

「転入生が？」

確かにそれは——珍しい。

普通の高校なら結構あるのかも知れないがここはIS学園。——つまり、この世界の均衡を打ち崩した兵器を扱うような所だ。

そんなに容易く転入できるような所ではない。

そこから導き出される答えと言えば、

「……代表候補生なのか？そいつ」

そう聞くと織斑はおっ！っというような表情をして、また話を続けた。

「すげえなキンジ、よくわかるな！ああ、確かに来るのは中国の代表候補生らしいぞ？」

やっぱり。と心のなかで呟く。まあ大体分かるか。そんな頭のよろしくない俺でもわかるくらいだし。

言っちゃえば政府の手が加わらんと、んなこと無理だろ。

しかもここは、『IS学園』。つまり、ISを扱う場所だ。

つまり、『女』で、『IS操縦者』で、『政府に干渉出来るほどの者』

——代表候補生だ。

「しっかしなあ……」

俺が一人で心の中解説を行っていると思斑は椅子の後ろ足を少し浮かし、天を仰いだ。

「?どうした思斑。中国に嫌な思い出でもあるのか?」

俺は自分のなかに存在するらしい優しさという成分を少しだけ織り混ぜながら思斑にそう問い掛けた。

「いや……思い出つて言えば思い出なんだが……ま、あり得ないか」

思斑は顎に手を当てて一人で考え込み、一人で自己完結した。

「あ、そう言えばさ、どうするんだ?」

思斑がまた、主語の抜けた会話を振ってくる。

「何が?」

きつとあまり重要性の無いことなんだろう、と思斑軽く聞き流そうとするが、そうもいかなかった。

「来月のクラス対抗戦」

「……………」

俺は思わず苦虫を噛み潰したかのような顔をする。

読んで字の如く、『クラス対抗戦』

これはクラスのトップが——つまり、クラス代表が他のクラスとＩＳで戦うリーグマッチだ。

本格的なＩＳ学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。

そしてまた、クラス朝単位での交流及びクラスの団結の為のイベントだそうだ。

そして、やる気を出させるために勝った一位クラスには、優勝賞品として、学食デザートの半年フリーパスが配られる。

そして俺は、これのせいで厄介な事になった。

それは、

「フフ……ももまん食べ放題」

「ねーねーねー皆！お菓子食べ放題だって？なに食べたい？理子はねーパフェ食べたい！」

このバカ共のせいでな……！

そう、このバカ二人はこのフリーパスが欲しいがゆえに……！

「はあ！？今日から訓練する！？」

それは今日の俺の朝の第一声だった。

「うん。あんたには絶対勝って貰わなきゃならないからね。仮にも武偵校の生徒なんだし」

まあ。言ってることは正しいのかもしれない。

だがなアリア。お前さっきうわ言で「フリース……もまん食べ放題……」とか呟いてただろっ！

「アリア」んじゃあこの理子りんも手伝ってあげるよ」

そう言っアリアに抱き付いたのは、理子。

勿論こいつの目的もフリースだろう。

何てったってこいつは大の甘党だからな。

すると理子がアリアに向かって何か耳打ちをし始めた。なんだ？

それを聞き終わるとアリアの顔が真っ赤になっていき！

「なっ！ん、んな訳無いでしょ！ばっ！馬鹿じゃにやいのっ！！アタシは別にキンジと二人になりたくてやってる訳じゃないのっ！」

だったらそんな動揺するなよ。

「と、とにかくっ！今日からは放課後体育館ッ！遅れたら——」

そこまでいって瞬時にホルスターから例のブツを取りだし。

「風穴ッ！」

アリアの名言とも取れるこの言葉をいったのである。

「はぁ……」

俺が深い溜め息をつく。

「ん？お前なんかあったのか？」

すると織斑がそう聞いてきたので今日から起こる悲劇を織斑に打ち明けた。

「そうなのか？実は俺も今日筭と練習するんだよ。だからさ、今日見に行つていいか？」

「俺は別に構わないが。一応、篠ノ之には防弾チョッキ。お前はISを展開しとけ」

それを言うつと織斑は何で？といったかおになった。分かりやすいな。

「『もしも』の時の予防だよ」

言っちゃえばこのもしもは60%位の可能性であたる。

こんな他愛なくはない会話をしていたら周りには女子が寄ってきていた。

「遠山くん頑張ってね」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機を持つてるのは一組と四組だけだから、余裕だよ！」

やいのやいのと楽しそうな女子達の会話を盛り下げることなんてできるわけもなく、俺は一言だけ「おう」と言っておいた。

「——その情報、古いよ」

不意に、教室の入り口辺りから、声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、結構偉そうな態度をとる彼女。

彼女は一体——「鈴……？お前鈴か！？」ん？

隣を見ると織斑が……何て言えばいいんだ？

……そうだな。久しぶりに友達と会ったような顔をしている。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふつと小さく笑みを漏らす。ツインテールが軽く揺れ、ふわり、と女子特有の甘い香りがした。

「何格好つけてんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ……！ 何てこと言うのよ、アンタは！」

さつきとは打って変わり、きつとこっちが彼女の本性なのだろう。確かにあれは似合ってたし。

ところでなんだが……。

「あの…… 鳳？ 歯を食い縛った方が良いぞ。結構頭にクるから」

「はあ？ 何言ってるのよ？」

その言葉が、合図だった。

バシンッ！

嗚呼、無情に響くは出席簿の音。——鬼教官こと、織斑先生の登場である。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさともどね。そして入り口に立つな。邪魔だ」

「す、すみません」

さっきまでの威勢は何処へ。悲しきかな人間の習性。織斑先生には逆らうまい。と。

そしてすごすごとドアからどく鳳。その態度はもう完全にビビってる状態だ。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！……それとこのアンタ！」

指差されたのは、俺。

「なぜ？」

そしてその答えを聞くまでもなく織斑先生という驚異が鳳を戻らせる。

そして、

「……一夏、今のは誰だ？やけに親しそうだったが」

こっちはこっちで大変そうだが。

バシンバシンバシンバシン！

織斑先生の出席簿が火を噴き、その他の女子も頭を叩かれる。無論織斑を含めて。

とにかくまた、面倒事が増えそうな朝であった。

セカンド幼馴染み（後書き）

うーん何かまともな終わり方があまり浮かばない……。

そしていろいろと設定に無理があるこの小説。……どうしたもんかな。

まあ矛盾点、感想、誤字脱字があればよろしくお願いします！

また次回でお会いしましょう！

傲慢な人間は（前書き）

ども、チキン執事でつす。

なんとも言えないものになりました。

では、どうぞ！

傲慢な人間は

「待ってたわよ、一夏！」

それは、ラーメンが鎮座しているお盆を持った少女が発した言葉だった。

ここは食堂。周りを見渡せばそこかしこに生徒が存在している。

でーん、と俺達の前に立ち塞がったのは今日の朝、転入してきたらしいやけに織斑と親しそうな、いや、朝のあの態度をみる限り実際に親しいのだろう。

彼女の特徴とも言えるツインテールが微かに揺れる。

ふと。ふとなんだが俺は一つの事実気が付いた。

……凰、こいつ、アリアと軽くキャラ被ってないか……？

勝ち気なつり目。言わずもがな髪型。身長。

言いにくいのだが未発達な体（部分的な意味でも）

まあ、これ以上追及するとあとで二人からの攻撃が来そうなので止めておこう。

「まあ、とりあえずそこ退いてくれ。食券出せないし、普通に通行人の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

織斑のそんな一言に鳳は顔を赤くしてそう言った。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「どう希望だよ、そりゃ……」

思ったんだが織斑の周りの女って特別個性が有るよな……え？お前が言うなだって……。ハハッ止めるよ。俺が頑張って目を反らしていた現実を言わないでほしい。

「あー、ゴホンゴホン！」

と、篠ノ之がわざとらしく咳をした。きつと嫌なのだろう。好きなやつが知らない女と話しているところをみるのが。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

そんなことは露知らず。織斑は鳳を連れ席に歩いていく。

さて、俺もなんか買おうかな。

織斑が買ったやつが旨そうだったな。そう思い、俺は学食の券を買おうと財布を取り出したときだった。

「き、キンちゃん！」

「……………何だよ」

この呼び方で分かるように、彼女は白雪だ。

白雪が廊下から少しはや歩きで此方へ駆け寄ってくる。

手に紫色の包みを抱えて。

あれは……重箱か何か？多分そうだろう。

そしてこれからいうことも――。

「き、キンちゃん？よかったら何だけどこれ、食べない？」

……………やっぱりな。

まあ、嬉しいことに変わりはない。

こいつの料理はやたらと旨いからな。

「ああ、ありがとな。貰うよ」

俺は白雪の持っていた包みを受け取る。

すると白雪の顔がぱあ、と明るくなり！

「え、ええとそのっ！ありがとうございますキンちゃん様！」

出た、意味のわからん二重接尾辞。

「あ、ああ。まあ、行こうぜ」

俺は一抹の不安を覚えながら白雪と共に織斑達のところへ向かった。着くとそこには織斑や凰、セシリアに始まり篠ノ之までもが同じテーブルに付いていた。

残りの席は……3つか。よし、俺と白雪は座れるな。

それを確認したあと、俺は織斑の隣についた。

あれ？そう言えばなんで織斑の横が空いてるんだ？

普通なら……ああ。

理由は、すぐにわかった。

その理由とは、篠ノ之が『私は気まずくてそこに座れないけど誰か座ったら殺すぞ』という視線をガンガンこちらに送って来ていた。

俺が席に着くと、篠ノ之は安心したような顔になる。

つまりは座っていいんだな。

「そう言えばだが織斑と凰は仲良さげだが幼馴染みか何かか？」

「そうだ。お前らは一体どういう関係だ？まさか……っ、付き合っ

てる、のか？」

俺のあとに続くように篠ノ之が織斑に詰め寄る。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染みだよ」

「……………」

「？何睨んでるんだ？」

「何でもないわよっ！」

うわっ……THE鈍感。唐変木な奴だな織斑は。

「幼馴染み……？」

その一言を怪訝な顔で織斑に箒は聞き返した。

「あー、えっとだな。箒が引越して行ったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小四の終わりだったから、ちょうど入れ違いだな。で、ほら。こっちが箒。前に話したろ？小学校からの幼馴染みで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふーん、そうなんだ」

凰は篠ノ之をじろじろと見ている。そして篠ノ之も負けじと凰をじろじろと見ていた。

「始めまして、これから宜しくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言つて挨拶を交わす二人の間には火花が飛び散っている。ように見える。

うん。どうやら織斑も俺と同じく見えているらしい。

さつきから目をしばしばしている。

「ところでさキンちゃん」

と、正面にいる白雪がそう話を振ってきた。

「ん？なんだ？」

俺は目の前にある食事に箸を伸ばしつつも白雪の問いにそう答えた。

「キンちゃんって今日アリアたちと訓練するの？」

カラッ……。

思わず手に持っていた漆で黒光りしてる箸をテーブルの上に落とす。

……忘れてた。

ああ思い出したくもなかった。出来れば永遠にな。

「ああ、そうだよ。……はあ、面倒臭」

思わずため息が出る。

溜め息を吐くと幸せが逃げるといふが俺には関係ない。

きつと俺には幸せなんて残ってないからな。

あれ？どうしてだ。泣きたくなってきたぞ。

独りでに感傷に浸っていると、そこに思わぬ乱入者が現れた。

「へえー何、アンタ訓練するの？」

—— 凰だ、

「あ、ああ」

凰はまるで俺の事を新しい玩具か何かを見たときの様に興味津々、まさに好奇心に溢れた目をしていた。

「ねー。じゃあさじゃあさ放課後、模擬戦しない？」

そしてこんな発言をしましたとさ。

ってバカだろ……。これからどうせ戦う相手にそんなことすると思ってるのか？

「む、無理だ。俺にはなんのメリットもないし……」

「ないし？」

「っ……！と、とにかく無理だっ！」

ふうーん、と鳳が此方から視線を、手元の飲み物へと変え――

「怖いんだ」

一言、そう言った。

怖い？ふざけんな。お前よりレキの方が百倍近く怖いわ。と言ってやろうと思っても、声がでない。

何故だ？

怖い？

違う。

じゃあなぜ？

それは――

内心、きっと俺は、『こいつら』の事を見下して居るから。

いや、違う。

似ているかもしれないが、違う。

見下して居るのではない。優越感を得ているのかもしれない。

元々こいつより戦闘経験、実力、判断がある自分に。

だから、『戦わなくても勝負は見えている』

そう、思っているのかもしれない。

駄目だ。こんな思考棄てなければ。

人間は貪欲だ。強くなれば成る程その貪欲さは大きくなる。

そしてそれは、いつか身を滅ぼすだろう。

——これはカナ。——いや、兄さんの教え。

俺はそんな風にはなりたくはない。

だから、

「確かに、怖いかもな」

それを聞いた凰がフツと口元を歪める。

「あーあ。なーんだ。一夏倒したって言ってたからもっと強いやつかと思つたら、」

「なんか興醒めね」

少しだけ、織斑が眉尻を歪める。今の発言を不服に感じてくれたんだろう。優しいな。

「いやー。怖いぜ。『そんな自分は凄いと思い込んでる輩の』発言はな」

その言葉を火蓋に、俺達が座っているテーブルの体感温度が一気に下がる。

「なん……ですって……！」

つり目がちな目をさらにつり上げてこっちをにらんでくる。

「そういう発言、行動控えた方が良いぞ？井の中の蛙大海を知らずってな。お前より凄い奴なんて五万といる。いや、実際見ててかなり痛々しいな」

その発言に遂にぶちギレたらしく、机をおもいつき叩く。

「アンタ何言ってるの！？私の苦勞も知らないくせになんで凄く無いなんて言えんのよ！？」

「はぁ？お前こそ何いってるんだ？俺はただ単に、『お前より凄い奴は沢山居る』と言っただけでお前が凄く無いなんて一言もいってないぞ」

そう、確かに鳳は凄いと思う。

何故ならこいつは織斑と別れたのが中二の終わり、つまり一年近くでここまで這い上がったのだ。これを凄く無いなんて言えないだろう。

しかし、だ。

俺はお前より凄くてお前より強くてお前より苦労してきた人間なんて沢山見てきたんだよ。

例えば、

「神崎・H・アリア」

俺がボソツと出した名前に、鳳が首をかしげる

「いたろ。あのピンク頭。あいつはな、元々、ロンドン武偵局に居て、そこで武偵活動やってたんだよ」

「その時のあいつ」

「犯人一人も逃したことないんだってよ」

「!?!?!?!」

皆の顔が驚愕に染まる。

一応皆も軽く位だが武偵の事を理解しているようだ。

武偵活動とははっきりいうと警察じゃあ手のつけられないような仕事をこなす。

いい意味でも悪い意味でも。

例えば子猫の探索。そして、

凶悪な犯罪者、等だ。

アリアは基本的に強襲という、武偵のなかでも危険な作戦でいつも勝利を納めていた。

「で、なんでアリアがこんなことを続けているか分かるか？」

皆は顔を見合わせ、分からないといった感じのオーラを漂わせる。

「あいつはな、自分の母親を助けるためにやってんだよ」

「……………」

「詳しくは言えないけどな。あいつの母親は凶悪な犯罪集団に嵌められて今刑務所にいるんだ。——有罪判決が出れば、死刑でな」

「あいつ、アリアはな、そうやってやってればいつかはそいつらにたどり着けると思ってそうやって来たんだよ。それに比べて、どうだ？お前は？それでもお前は自分の方が偉いとも言えるのか？自己欲の為に力を入れ、自己欲の為にそれを奮う。楽しいだろうな。きつと。でもな、あいつには一日一日に命掛けてんだよ」

「そつ、そ、れ……は」

凰がおどおどしてとても齒切れが悪い。

「じゃっ、じゃあ！じゃあそういうアンタはどうなのよっ！それだけ偉そうなこといつてゐるんだからっ！」

これは、きつと追い詰められた子供が言うような事。

弱く、儚い。まるで根拠も脈絡も。何でもない。詭弁だ。とでも言っておけば適当に済ませられただろう。

「偉い。とは確かに言えねえよ。確かに俺は逃げ回っているよ。現実からも武偵からもな」

でもな、と俺は言葉を紡ぐ。

「皆、とは言わない。でも出来る範囲。手の届く距離の者なら」

「あの『力』を使ってでも守る」

そう遠くない過去。俺の決めた意志。

へっ、上等だ。こっちは代々強制的にヒーローやらされてるんだ。それぐらいどつてことない。

「……………名前」

ボソッと。鳳の口から言葉が漏れた。

「ん？」

「アンタの……………名前」

うつ向きながら、そう言う鳳。

ああ、確かに、毎回アンタじゃ面倒くさいよな。

「俺は遠山、遠山キンジだ」

それをきくと彼女はいきり立ち空になったラーメンのどんぶりをお盆で持ち去っていった。

そして、

「あたしまだアンタの侮辱発言許して無いんだからね！覚悟しなさい！戦いの時はメツタメツタにしてやるから！覚えておきなさいよ！『遠山』！」

それだけいうと、鳳は食堂を去っていった。

きつと悪い奴ではないんだろうな？
ただ少し、傲慢になりすぎただけであつて。

次会うときはきつと戦いの場になるだろう。

それこそ、望んでいなかった展開に、嫌気が差す。

あーあ。どうしてこうなつた。

問うても返してくれるものはなく、帰ってきたのは女子達の喧騒。

やっぱり、

俺に平和は訪れないらしい。

そう察知した俺は思考を放棄した。

まあ、とにかく。

疲れた。

ついでに言ってしまうとあの凰の声で織斑先生が駆けつけ、出席簿で叩かれたのは余談である。

傲慢な人間は（後書き）

はあ、キンジ無双が早く書きたい。

多分キンジ無双は次に、ようやく書けると思いますが、まあ期待していてください！

放課後の訓練と（前書き）

どうもです。

ようやく更新いたしました！

ではどうぞっ！

放課後の訓練と

放課後の、第三アリーナ。

そこには、一組の男女の姿があつた。

「キンジ！いくわよっ！！」

「ああ、もうどうにでもなれっ！」

此方へ、駆け寄ってくるアリア。

俺は、構える。

そうして俺の胸にアリアが飛び込む。

——様にして、技を仕掛けた。

バリツだ。

アリアは俺の腕をとり、軸足を払い、投げた。

体が空中に浮く感覚。投げられた。

ここから体を捻って正面を向けば、きつと投げられた力で転ぶな。

よし、と俺は意気込み、アリアに銃を向ける。

この銃はゴム弾。さほどダメージのない仕様になっている。

そして俺は銃をアリアに向け、弾を放つ。

タァンタァン！

心地のよい発砲音を奏で、相手に一直線に飛んでいく。

俺が狙ったのは足のくるぶしと脇腹。

相手の動きを止めるためだ。

しかし、アリアはそんな俺の攻撃は目にも止めず簡単に双剣ではじく。

俺は撃ったあと体を少しだけ捻り、右足だけを浮かしたまま着地し勢いをいかしそのまままわし蹴りを放つ。

が、

ガンっ！

鈍い金属音と共に俺の足には重い衝撃が。

受け止められた。アリアの剣によって。

アリアは直ぐ様に武器をしまい接近戦へと移行する。

アリアの基本は、接近戦。

シャーロックホームズお得意のバリツを使い、此方を翻弄してくる。

そう言えばだが、アリアとこうして戦うのは初めてだな。

アリアもそれがわかっているのか、心なしか口元が緩んでいる。

そうして遂に――

ジャキンッ！

俺の眉間の目の前でトリガーを引き、

「私のかちね、キンジッ」

屈託のない笑みでそう告げた。

「……疲れた」

終わったと思うが否やで疲れがドット来る。

てか俺よくここまで長引かせたな。
ちよっと自分に感心するぞ。

「中々強くなってるんじゃないッ キンジ」

どうやらアリアはご満悦のご様子。

悪い評価でもないらしい。

「なんでだ？普通にぼろ負けしてただろ？」

「まあ、確かにね。でもあの狙いはよかったわよ？当たっていれば負けてたかもしれないし」

当たっていたら…な。

そんなことをいつてしまえば俺も避けていたら勝てたかもしれない。

が、それができない。

アリアには出来た。その違いだ。

俺は深く溜め息を吐く。

何せこの戦いが終わっても。

「アリア」次は理子のターンだよ！」

この武装ゴスロリが待ってるからな……！

そして今回はさらに面倒なことに体に機械の装甲——ISを装着している。

「くふふっ！さあキーくん！デュエルスタート！」

アリアは理子のヤル気満々な顔を見て、「分かったわよ」と息を吐き、アリーナの端へ寄っていった。

「くっそ……！なんで俺がこんなことに」

悪態を吐きながらも、IS、『桜華』を展開する。

展開し終わった俺の手には、桜華の特殊武器、『白桜』。

こいつはまだISに乗るのはこれが初めてだろう。

だが、仲間やって来たから解ることはある。

それは、

嘗めてかかると、文字どおり痛い目を見る。

ニイ……と肉食な笑みを浮かべる。

まるでライオンのような笑みを。

その目でなめ回されるように見られ、俺は血の気が引く感覚に襲われる。

……っ！駄目だ。このままじゃ相手のペースに巻き込まれる。

しっかり気を持たなきゃな。そう思い俺はキッと睨むように目を力をいれる。

「ああん、キーくんのそういう目、だあーい好き。理子コーフンしちゃう。」

「黙れ理子」

そっつい放つと理子は「はい」と返事をして、此方に構えた。

「じゃあ、行くよ？」

俺は心のなかで来んな。と呟くが相手は此方へ踏み込んでくる。

理子も、どちらかというとな近接よりか？

いや、確かそうだったはず、

あるとき、理子はアリアと同じくらいの戦闘能力があった。

つまり、近接戦闘力はSランク武偵レベルの力があるのだ。

そんな戦闘力を持った理子が訓練用IS『打鉄』を身に付けて此方へ攻撃を仕掛けてきている。

俺はそれを理解し、瞬時に防御体制へ移行。

相手の動きに合わせてワンステップ足を踏む。

相手の振り払った手が、目の前を通過する。

俺はそれを見計らい、相手の懐に白桜を構え、放つ。

が、理子はその他を下に叩き銃口をずらして回避し、一旦距離をとる。

……危ないな。

今のやり取りだけでも俺はもう無理な気がしてきたぞ。

一応俺はバスカービルのリーダーやってるけど一番弱い俺なんだぞ？

理解してんのか？いや、してないか。

そんな悪態をつくまもなく、今度は打鉄に付けられた武器の刀で此方に向かってきた。

俺は間合いに入られない様にバックステップで距離をとりつつも射撃を続ける。

「くふふっ、まだまだだね！キーくん！」

そう笑いながら、どんどんと距離を縮めてくる理子。

そうして最後には、

「こつれでっ！おっわりいっ！！」

ガギン！！

白桜が吹き飛ばされ、遂に俺は武器を失う。

「くっふふう。アリアに続き理子りんが勝ったよぉー！正義は勝つ！」

シャキン、とへんなポーズをとる理子。てか正義が勝つならお前負けるよな？多分。

ま、まあとにかく……。

「最終的には負けたがこれで訓練終わりだよな？……ああ、久し振りに嫌な汗かいたぞ。今日は飯くって早く寝るか」

だが、甘かった。

そう言えばそうだな。

こんなんで返してもらえるのなら、俺はここまで大変な思いはしなかっただろキンジ？

「何言ってるの？今のはウォーミングアップじゃない。これから私も打鉄を使って戦うし、今から白雪たちも合流するのよ？」

「だよねー！。まあアリアのことだから鬼畜ゲーになることは分かってたけど頑張ってるねーキーくん。理子は本気で戦いつつも緩く応援するよー！」

できれば逆にしてくれ。

とにかく。

「こ、殺す気かああああ！！！」

このとき、俺の本気の叫びが校内を木霊したらしい。

……ん？こんなやり取り前もやった気が……まあ気にしたら負けか。

「んじゃあ今日はここまでにしよっか」

終わった。と思う前に突っ込みたい部分が色々と出来た。

何だ？その今日は終わったけどまた明日あるからね的な言い方は？

それとなぜお前らはそんなに汗をかいていない？俺は身体中の水分と言う水分を出し尽くしたと思えるほどお前らにボコられたのだが？

俺はあのあとまんざんアリアたちにしごかれた後、その後にレキと白雪が加わりさらに厄介なことに。

もう殆んどローテーション状態でボコられたんだぞ。

ふう、と息を吐き一度落ち着いて回りを見る。

すると周りにいるバスカービルのメンバーが……何となく、その、何となくなんだが、

綺麗に、見えた。

ISに乗るときは、それのようなスーツ的なのが必要らしい。

しかし、実際それは……なんと言うか、露出度が水着レベルで……俺からしては大変危ない兵器と成る。

しかも動いて汗をかいていることにより、皆の雰囲気がより扇情的に……。

ジワァ……。

（——ッ！い、いかんぞ！耐えるキンジ！こんなところで『なっちまったら』ヤバいことになる！）

俺は目の前の現実から目を反らす。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

くっ……くそ……。

止まれ、と願っていても返ってくる反応は真逆の真芯に血が集まるようなあの感覚。

ドクン……ドクン！！

「おい、キンジ！」

そんなとき、後ろから聞こえたのは俺と同じ男の、

「ん？な、何だ？織斑」

……少し、集中して身体の真芯を確認する。

……ふう。

何とか大丈夫みたいだ。ありがとな織斑。

と、俺は心のなかで礼を言うておく。

「ああ、いや、丁度俺も終わったから、一緒に戻ろっぜ？」

何だ、そんなことか。と息を吐く。

まあ俺も別にすることなんてないし丁度いいか。

「分かった。んじゃあ行こうぜ」

「ああ」

俺は織斑と一緒にアリーナを出ていった。

「はぁ……疲れた……」

俺は武装を解いた瞬間の疲れを直に味わう。

「はぁ、ホントだよ……。ったく。箒のやつ、手加減をしるよな……」

そう呟く織斑の顔を見ればお世辞にも元気とは言える表情をしていなかった。

「大丈夫か？ 織斑……。顔、死んでるぞ」

俺がそういうと、

「お前も結構人のこと言えない顔してるぞ……？」

ん？ と思いそこにあつた鏡を見ると、

……うわっ、マジですげえ顔してやがる。これだから昼行灯って言われたのか？

俺はその顔を直すように顔を一度叩き、よし、と意気込む。

「てかキンジ。お前よく生きてたな？あれ見てて箸でさえ引いてたぞ」

それは常々俺も思っているんだよ織斑。

訓練で死ぬとか冗談じゃない。いや、マジで。

「一夏っ！」

そんなとき、パシユツと空気の抜けるような音がして、扉が開いた。

——凰だ。

「お疲れ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

おお、流石は幼馴染み。きつと少なからず織斑のことを理解しているんだろう。

「そっ、それと……はいっ」

そういつて手渡されたのは、スポーツドリンクだった。

「お、おう。ありがとな」

妙になれない感覚が身体を這う。

「良いのよ……別に。私が悪かったんだし」

凰がそっぽを向きながらそういう。

多分これはこの前の罪滅ぼしなのだろう。

ありがたいな。あんなんで悪いと思ってくれてるんならやっぱりこいつは優しいな。

「ね、ねえ、それで何だけどさ」

と、凰が織斑に向かって話しかけている。

「一夏さあ、私が居ないと寂しかった？」

うわっ。何て直接的な。流石にこれに気付かない馬鹿は……。

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

……いたな。

「いや、そうじゃなくってさあ」

少しニコニコしている凰。とても上機嫌そうだ。

てか俺がここにいるのってかなり場違いだよな？ここで逃げても俺は何も悪くない。

「んじやな、織斑。俺は先にいくぞ」

俺は凰から貰ったぬるめのスポドリを手に取り、廊下にあるいていく、その後に聞こえた、「えっ？ちよっ！ま、まてっ！」という織斑の声が聞こえて少し気分が良くなった。

パシユツ。と音がなりとびらがまた閉まる。

ふう。それじゃあ戻るかな。

と思ったが、織斑と凰の話が少し気になってきたぞ。

俺は少し扉の近くにより聞き耳をたてた。

きつと遠くだからあまり聞こえないだろうと思いながら聞き耳をたてていると、

「だから！幼馴染みならいいわけね！？」

という大きな声が俺の耳に響いた。

「うおっ！」

思わず俺は驚いて後ろに下がる。

少しして、ご立腹な顔をした凰が部屋から出てきて、ふんっ！と、鼻をならして歩いていった。

……原因はきつと、織斑だろう。

俺は扉をくぐり、その奥にいる首をかしげて鎮座しているバカを見た。

「なあ、織斑。お前凰になんつった？」

「ん？ああ、いや、『今日部屋に遊びに行つて良い？』つて聞かれたから『いや、箒に聞いてくれ。俺、あいつと同じ部屋だから』つていったら……」

ああ、なるほど納得。

「お前、バカだな」

「んなつ！？」

俺はそれだけ言い残し、また扉を出て歩いていった。

放課後の訓練と（後書き）

この頃終わり方が安定しない……！

どうしよう、書くのも浮かばなくなってきた。

あああああ……ヒスキンと鈴が戦うシーンしか思い浮かべれない！

唐変木2号誕生（前書き）

今回もなかなかカオスな出来になりました！（文章的な意味で）

つまらない作品ですがどうか見てやってください！

唐変木2号誕生

五月。あれから数週間たった。

そして、日を経つ毎に、俺の傷も増えていく。

そう、あれからまだ訓練、否、集団フルボッコはまだ続いている。

そのお陰で俺の精神的忍耐力や肉体的忍耐力は格段に上がったと言える。

それと同時にストレスはギリギリまで上昇。

精神は金やすりで削られたようにガリガリと削がれていった。

対抗戦は来週。この勢いじゃ対抗戦以前に俺のからだが持たねえよ。

しかし——そんな地獄も今日でおさらば。

ようやく終わるのだ、特訓が。

その理由は簡単。特訓に使うアリーナが対抗戦のために設定されるから、特訓はもうできないんだ。

「な、なあおい！鈴！」

「ふんっ！」

向こうから聞こえてきたのは織斑の声。

織斑が声を掛けるが鼻をならしツカツカと歩いていく凰。

……どうやらこちらはあのときのままこんな感じらしい。

というか織斑に聞いたところまたバカなことをやったらしい。

ホントもう救いようがないな。

「ま、まてっ、鈴「一夏！」……ん？ 箒か」

織斑が振り返ると、そこには篠ノ之が居た。

「どうしたんだ？ 今日の練習はまだだろ？」

「い、いや、しかしだなっ……と、とにかくいくぞっ！」

「えっ？ ちょっ！ お、おい引っ張るなよ！ おい！ キンジ！ 助けてくれえ〜」

俺は顔を赤らめた篠ノ之が織斑の首根っこをひっつかみお持ち帰りするのをただただ黙って見送ることしかできなかった。

「さて、俺はもう少し休んでようかな」

「なにいつてんの？ 行くわよキンジ。今日は今までやって来た事全部の復習だからね。あ、後最後だからって事でセシリアが今日加わるから。やっぱりIS操縦者も入れるべきよね」

しかし、現実はそのあまくない。

いつだって俺にまわり付いてくるのは不幸と書いて『ARIA』と

読むこのチビ。

「ほら、さっさと行くわよ、バカキンジ」

「ちよっ！ま、まてっ！まてえええええ！」

人はこれを、バチが当たった、と言っただろう。

よし、今度は織斑を助けてみようかな。

引きずられも俺は、そんなことを悠長に考えていた。

……逆に言えば、そうやって現実逃避することしか、俺には出来なかった。

「ほら、さっさと着替えなさい！」

その言葉の後に、俺は更衣室に放り投げられる。

「ぐあっ！？」

衝撃が、俺の身を襲う。

一瞬、一度食道を通った飯が再びこんにちわするところだったぞ……
……たく。

「はっ。お前も結局そうなったんだな」

そう言ってきたのは軽く死んだ目をした織斑。

「……俺達って、無力だな」

「……ああ」

俺達は無言で着替えを始める。

だってそうだろ？俺達はこれから死に行くのに笑ってられるか。

「……なあ、キンジ」

と、唐突に、織斑が話しかけてきた。

「何だ？」

「いや、なんか気になったんだが……。キンジって確か武偵高校っていう危険な高校にいるんだよね？」

危険。確かにそうだ。武偵というのはいつも死と隣り合わせの様なもの。強襲科なら尚更だ。

「……まあな。つっても俺は元々武偵高校を抜けるつもりだ」

「えっ？何でだ」

織斑がそう、聞いてくる。

「俺が一年の頃、兄さんが、死んだんだよ」

その言葉に、織斑が息を飲むのが分かった。

「兄さんも武偵だったんだ。俺の憧れだ。完璧で優秀で凄い兄さんに、兄さんみたいに俺も立派な武偵になりたかった」

でもな、と俺は続ける。

「結局は死ぬんだよ。父さんも兄さんも。武偵なんてやってたせいでな。だから、俺はあんなおかしな高校に居たくないんだよ。もう、身近な人間が死ぬのを見たくないんだ」

「俺達、遠山家は昔からこの厄介な力のせいで『正義の味方』をやられてたんだ」

「でも俺はそんな力要らなかった。その力が……この力が俺の兄さんを殺したんだ……！」

「それは……！」

「ああ、違つかもしれない！もしかしたら兄さんは自ら進んで死ぬ道を選んだのかも知れない！……でもな、俺はそれで許容出来るほどできた人間じゃ無いんだよ……！」

壁をガンツ！と殴り付ける。

そしてその音に怯えた織斑は肩を震わせた。

「……悪い。興奮しすぎた」

「い、いや、俺の方こそ……その、悪いな。その、お兄さんの事、思い出させちゃって……」

あ、

その言葉を聞いて、俺は大切なことを言い忘れていたことに気づく。

兄さんは、生きている。

いや、生きていた事実を。

こいつに言ってない!!

「あ、あの……織斑？」

「ほ、本当に、悪かったな……そんな辛い過去があったのか……」

「ちょっと、ま、待ってくれ」

「いや、良いんだ。今はお前に責められても仕方がないんだ……」

「あーもう！兄さんは生きてるんだよ！」

「いや、だから……え？」

時が、止まる。

「……………」

更衣室から出るや否やでそんなおかしな事をいつてくるアリア。

変な事って何だよ。変な事って。

「うっわ。ここまでの女の子揃えておいてまさかのブルート？それはさすがにドン引きだよ、キーくん」

それに便乗するかのようにニヤニヤ顔でさらにややこしい事にする理子。

そしてそれを聞いて若干心配そうな顔をして俺の方を覗き込んでくるレキと白雪。おい、やめてくれ。
そんな生暖かい目でこっち見んな。

「待つてたわよ！一夏！」

そんな視線から逃れるために俺は視線を織斑の方に移す。すると織斑の視線の先には前ほどとは打って変わり、上機嫌な凰が居た。

「貴様っ！どうやってここに――」

「まあまあ、良いじゃないですか。そんな毎日声を荒げていては持ちませんわよ？」

そんなセシリアの言葉に、篠ノ之はくっ……と唸りそれ以上問うことはしなかった。

「良いじゃない。関係者以外立ち入り禁止だけど私は『一夏関係者』だからね。ね？」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだ……」

流石に今の言葉は挑発的だった為、篠ノ之はこめかみをひくひくとひきつらせながらもそう返した。

織斑が危ないな。ほら、顔からして今バカなこと考えてるぞ。

「……おかしい事を考えているだろう、一夏」

あ、飛び火した。

「いえ、なにも。歩く出刃包丁に対する警報を発令しただけです」

「お、お前というやつはっ——！」

織斑につかみかかろうとする篠ノ之の手を何かが遮った。

凰の手だ。

「今は私の出番。私が主役なの。脇役はすっこんでてよ」

「わっ、脇やつ——！？」

「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！私を怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

うん。織斑の言い分はとても正しいはずだ。

「あんだねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ!？」

おう。

「おう」

お、シンクロした。

「なんか変か？」

焦れたように声を荒げて、頭をかく凰。

「謝りなさいよ!」

……………えええええええええ。

おかしい。どうして織斑の回りのやつは直接的に気持ちを伝えることが出来ないんだ？

回りくどすぎて織斑にダメージ与えてる現実に気付け。

「だから、何でだよ!約束覚えてただろうが!」

ほら、あんな言い方されたら誰だって怒るだろ?流石の織斑だってイライラしてるぞ。

「あつきた。まだそんな寝言言ってるの！？約束の意味が違うのよ、意味が！」

そんな話の中でも織斑はバカなことを考える顔をしてやがる。こいつ脳みそどうなってるんだ？
てか、そろそろオーバーヒートしそうだ。

だれか止めに……って。俺しかいねえよな。止めれる人物。

俺はため息をつきつつも二人に近寄る。

「おい。二人とも、いい加減にしておけ。それと、鳳。お前もあれだ。少し暴力的すぎるぞ」

「うるさいっ！あんたには関係ないでしょ！しかも悪いのはこいつよ！」

「何で俺が悪いんだ！てかさつきからなんなんだよ！言いたいことがあるなら言えよ！」

その言い分は正しい。
しかし……

「なあ、織斑。さつきから言ってる約束ってなんなんだ？主語の意味が分からんからあまり話に加われないんだが」

「ああ、約束ってのはな——」

「ちよつ。待ちなさ——！！！」

「なんか『鈴の料理の腕が上がったら酢豚を毎日作ってくれる』っていう奴だよな。うん」

凰の顔が、ボンツと赤くなる。

回りを見渡せばキヤーキヤー言ってるアリアと白雪。と、その他大勢の女子。

理子に至っては「おおー！ いっちーも」フラグばつきばきー！何て言ってるぞ。

てか『も』って何だよ。まるで前例がいるみたいじゃねえか。

まあ今の約束で分かったことは……。

「良かったじゃないか。織斑。お前毎日酢豚おごってもらえるらしいぞ？」

「……まさかのあんたも!?」

うおっ。皆が突っ込んできた。なんか変なこといったか？俺？

視線を戻すと涙目でプルプルと震えている凰が居た。

「ア……」

「ア？」

「あ、あ、アンタねえ！！もうあったまきた！許さないんだから

「！」

「うわっ！？どうしたんだ凰？急に怒って」

「黙れ唐変木2号！大体はあんたのせいよっ！良いわ！あんたは来週のカラス対抗戦でボッコボコにしてやるんだから！」

何で俺にこんな飛び火が？俺なんかしたのか？

「あんたらはもう絶対！ぜええったい許さないんだから！覚えておきなさいよ！」

怒り沸騰なご様子で更衣室へ戻っていく凰。

しかしどうしよう。俺なにも悪いことしてない筈なのに凄く責められたぞ？

何がどうあれ仲良く戦うことは不可能となってしまうたらしい。

もういたいなんなんだ。

唐変木2号誕生（後書き）

次はいよいよ鈴戦！

次こそついにキンジの本領発揮！？

クラス対抗戦と、突然の乱入……者？（前書き）

が、頑張った……。

今回長めです。

そして長文なためきつと誤字があると思われます。

あつたら明日にでも直しますのでご了承ください。

ではどうぞ！

クラス対抗戦。と、突然の乱入……者？

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と凰。

噂の新生生同士の戦いのせいか、アリーナは全席満員。と、言うか通路まで人で賑わっている。

そして会場入り出来なかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

今は試合開始の三分前。もうでなくてはいけないのだが、理子が始まる前に俺に用事があるらしいので俺は少し焦りながらも待っていた。

「あ、あのキンジさん。そろそろでなくては……」

そう言うのはセシリア。しかもいるのはセシリアだけではなく、織斑、織斑先生、山田先生、そして理子を除いたバスケービルメンバ―だ。

「遠山、後二分だ。早「きーーーーくうん！」……峰、静かに――」

織斑先生は、そこで言葉を止めた。

いや、止めてしまった。

それは――理子が、俺の唇に唇を重ねてきた光景によって。

「んーーーー！？ん！！」

俺は目を見開いてなんとか逃れようとするが、理子がかっしりホルドしてくるため、逃れられない。

そして、俺の体に異変が起こる。

理子とのキスで段々俺の体の芯がドクン…ドクンと脈をうち始め、段々早くなっていく。

ドクン…ドクン…ドクンドクンドクンドクン…！

ま、不味い！！もう、なりかかってる！！

俺は意地でもなりたくないんだっ！

俺は気をそらすために目をしたへと向ける。

すると、俺の腕が理子の胸に埋まってるのが見えて……その後、ついに俺は……………。

ぷはっ！

流石に理子も息が続かないらしく、俺から唇を離す。

すると理子はニタアと妖しく笑い、

「どう？キーくん、なった？」

そう聞いてきた。

「理子……また君には奪われてしまったね？」

「くふふつ。ガードの薄いキーくんがいけないんだよ」

「いけない子だ」

今の理子の行動に皆が啞然としている。

「あ、アンツタねえ!!」

アリアがそれにきれてガバメントを取りだしこちらに構える。

しかし――。

チャキン!!

左足のバネを使い疾走。低く屈み、腰に力を入れ俺は一瞬でアリアの元に行き、トリガーに指を入れる。

「アリア？駄目じゃないか。こんなところで撃つたら被害が出るよ？」

それを聞いて、アリアが眉を歪める。

しかし――。

「キンジ、なつたのね？」

アリアは今の一連の動きで分かったらしく愉快そうに口元を歪める。

「ああ、そうだよアリア。それにしてもアリア。嫉妬してくれてるのは嬉しいけど発砲は良くないな」

それを聞いたアリアは顔をボンツと真っ赤にして、

「し、し、嫉妬！？ん、んな分けないでしょ！？バカキンジー！」

「そうなのかい？アリア。じゃあどいう事が聞かせてもらえないかな？」

「ううううう……」

「あ、あの、理子さん？あのさつきからSな雰囲気漂わせる人はいったい誰ですの？」

「ん？オルオルは目がおかしくなったの？キーくんだよ。キーくん。遠山キンジ」

「いや、そーでは無くて！あれ明らかに違う人ですわよね！？誰ですのアレ！？」

「ですよねっ！？あんな遠山くん見たことありませんよ私！」

「おい、キンジ！戻ってこーい！」

「ふん。異性交遊盛んなことで大変結構だがここは学舎だ。自重しろ」

その時、いつものように振り下ろされた織斑先生の出席簿。

が、

「おやおや、危ないじゃ無いですか『千冬さん』。レディがこんなものを振り回していけないな」

そう言つて俺は、左の手の指二本で出席簿を止め、後ろに回り込むようにして織斑先生の動きを止める。

……………おいおい、ヒステリアの俺よ。

なにバカなことやってんだよおおおお！！

その動きを見て更に皆が啞然とする。

「……………な、なっ！？」

わああ。織斑先生の顔が真っ赤だ。これは少し見ものかもしれない。

「と、遠山くん？そ、その、し、試合開始時間3分過ぎてしまつてるんですが…………」

「おっと。それはいけないね。時間にルーズな男は駄目だから。ありがとう。真耶」

「ま、ま、ま真耶あ！？」

顔を真っ赤にして自分の名前を叫ぶ山田先生。

あー。これは、あれだ。明後日辺り死ぬぞ、多分。

んで決め手はこれだ。

「それじゃあ行ってくるよ。『子猫ちゃん達』」

……さよなら俺の人生。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

俺がアリーナに出るとまず迎えてくれたのは黄色い歓声とアナウンス。

そして――。

「遠山、何があつたつてもう許さないわよ？ 覚悟しなさい」

ISを纏った凰がそこに佇んでいた。

「ふうん。そうかい。俺は女性に痛め付けられる趣味はないんだけどね。まあ、君がしてほしいなら俺が、その逆をやってあげよう」

ヒステリアの俺がそんな血迷った発言をすると鈴は少し慌てた顔になった。

「うつ……。五月蠅いわね！ 一応いっついてあげるけどISの絶対

防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破するダメージがあればそのダメージは本体に行くのよ」

「なら、大丈夫だ」

「は？」

「その威力があっても当たらなければなんの問題も無いからね」

さも当然のように俺はいい放つ。

「……あんたはいつもそうやって私を侮辱するわね！」

キツとこちらを睨んでくる凰。うおっ。怖い怖い

しかし、だ。

俺は今ヒステリアモードだ。

もう、負けない。

俺は目を鋭く、重心を少し前のめりにする。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーツと鳴り響くブザー、そのブザー音がきれた瞬間、凰は動いた。

流石は代表候補生、と言ったところか。

まずこちらに向かっては来ているものの僅かに動きながらの突進。

狙いを定めさせないためだ。俺の武器を理解しての行動だろう。

そして迫る間にも鳳は武器を構築、そして攻撃モーションにはいる。

武器は青竜刀らしき物だ。

両端に刃が付いた形状となっている。

そして鳳はそれをバトンのように扱い、華麗に角度を変えつつも攻撃をしてくる。

俺はそれをナイフで防ぐ。

いや、もうなんか簡単に防げてしまっんだが。防ぐたびに鳳の顔が……。

「くっ……。あんたは……！」

「おやおや、どうしたんだい？そんなに怒らないでくれ。その顔も素敵だけど鈴は笑った顔が一番綺麗だ」

黙ってくれ。ヒステリアの俺。それ以上なにも言っな。首つるぞ。

「うっ。五月蠅い！くらえっ！！」

そう言つと鳳の肩のアーマーがスライドして開く。

中心の球体が光った瞬間、俺は何かの衝撃によって飛ばされた。

???何があった? いや、そういうことか。

今の攻撃はきつと圧力を使った衝撃砲の類だろう。

弾が見えなかった理由もうなずける。

「今の、ジャブだから」

地面に立っている俺にたいして斜め上からニヤリと不敵な笑みを浮かべてそういう鈴。

そうしてまたあの攻撃を放つきのだろう。

何故ならジャブの後はストレート。

そう相場が決まっている。

予想通りさっきよりタメが長い。

そして放たれた。

衝撃砲は、当たった。

俺ではなく、地面にだが。

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

「鈴。君は勘違いをしているようだね。砲身も砲弾も目に見えないんじゃない」

俺はまっすぐ前を見据え。

「たかがそれだけ見えてないだけなんだよ」

「それだけって……。じゃあ他に何かあるって言うのよ」

「鈴の視線。空間の歪み。着弾距離。発射音から着弾するまでの時間。その龍咆は砲身斜角が無制限で撃てても、それが分かってしまえばなんの意味もない」

それこそ、アリーナ中が啞然とした。

当たり前だ。俺が言ってることは普通の人間の反射神経や動体視力を逸していないと出来ないことだから。

「でまかせに決まってるわ!」

凰は自棄になったらしくこつちに龍咆を連発してくる。

全てを紙一重で俺は避ける。

「鈴。悪いけどこれ以上続けても一方的な消耗戦になるだけだよ? だから――」

「終わりだ」

俺は《白桜》を展開し構え、龍咆と両刃型青竜刀を併用してきた凰の攻撃を避けつつも徐々にダメージを与えていく。

しかし――。

ズドオオオオンッ!!!

「!？」

凰が青竜刀を振り回すのをやめ、俺も打つのをやめ、そちらを見る。いまはまだそこには大きなクレーターと土煙しか見えない。が、そこには何かがいる。

『遠山、試合は中止よ！すぐにピットに戻って!』

凰からのそんなプライベート・チャンネル。

ああ、俺も逃げたいよ。だけどな？凰。

「そんなこと、出来るわけないだろう？君を置いて逃げるだって？冗談じゃない。俺は君を、鈴を」

——ヒステリアモードの俺がそんなこと。

「守る」

——出来るわけないだろ。

「君は、どうするんだい？」

「逃げるのなら、今のうちだ」

「残るのなら、俺が命がけで君を守ろう」

そう言いながらも、土煙の中から撃たれてくるビーム兵器を避ける。

「さあ、どうする？」

「……………あんた、本当に遠山？」

「ふふふ、おかしなことを聞くね。じゃあ鈴。目の前にいるのは誰だい？」

俺が少し顔を近づけてそう問うと、凰は顔を赤くしてそっぽを向いた。

「う、うるさいうるさいうるさい！今は目の前の敵に集中しなさい！」

「ふふっそうかい？じゃあ後でなら良いんだね？」

「……………あんたあとで覚えておきなさいよ」

「うわぁお。怖いな」

そこで俺は一度言葉を切り、言葉を紡ぐ。

「それじゃあ、反撃開始だ」

「もしもし！？遠山くん！凰さんも！聞いてますか！？」

ただただ虚空に向かって叫んでる教師が、そこには居た。

山田真耶である。

プライベート・チャンネルは声に出す必要がないのだが、彼女は今、それを忘れるぐらいに焦っているのだ。

ついでに言つと回りから見れば今の山田真耶は危ない人である。

「本人達がやると言ってるんだ。やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきな事を言ってるんですか！？」

「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「あ、はい。ありがとうございます。ッてじゃなくて！何でそんな安心していられるんですか！？」

安心？

その言葉を聞いて千冬は気付いた。

安心している事実。

こんな、危ない状況のなかで、自分は安心している。

何故？

多分それは……。

「……似ていた」

「え？」

「あのときのあいつの雰囲気、『あの人』に似ていたからか？」

かえって来るのは山田真耶の気の抜けた声と、顔。

ふふっ。私も呆れたものだな。

「先生！わたくしにIS使用許可を下さい！今すぐ出れますわ！」

「そうしてやりたいところだが、——これを見る」

「遮断シールドがレベル4に設定……ですか？大丈夫ですわ。出れます」

やけにハッキリと言い切るオルコットに疑問を抱く。

「何故だ？」

そして、もうひとつの疑問も。

「神崎達はどこへいった？」

それを聞くとオルコットは苦笑して、

「行っちゃいましたわ……」

「――壁を破壊して」

その時のオルコットの顔はもうお手上げ。といった状態だった。

「ふっ!!」

相手は近接も遠距離も中距離もいけるタイプ。

こちらが近付いてハンドガンで対応しようとするれば遠距離で。

こちらが中距離からの攻撃に移ろうとすれば近接攻撃を仕掛けてくる。

そして違和感が1つ。

それは、

『鈴。君はアレが何に見える?』

『は?何いってんの?少し形は変だけどどう見てもISじゃない』

『そうかい。じゃあ質問を変えよう』

『アレに人が乗ってると思うかな？』

『……まさか、そんなわけ——』

『いや、でもさっきからあのIS。話してるときはやたらと攻撃回数少ないわね』

そう、それはまるで——

『観察してるみたい』

「ううん。でも無人機なんて有り得ない。
ISは人が乗らないと動かないもの」

確かに、教科書にはそう記してあった。

が、

「仮にだ。仮に無人機だったらどうか？」

「なに？無人機だったら勝てんの？」

「ああ。勝てるよ。ここは武偵校じゃないけど俺は武偵校の生徒だ。
武偵法9条『武偵は如何なる状況に置いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない』。つまり——」

「これが人間じゃないならスクラップにしても問題はない」

それを聞くと凰はふつ。と笑い。

「それもそうね」

と短く返事をした。

「じゃあ早速だけど、俺が合図したら俺に向かって龍咆をMAXの
パワーで撃ってくれ」

「正気？かなりのダメージがあると思うけど……本気なの？」

「こんな状況で冗談は言わないさ」

「……分かったわ」

そう言うのと早速凰は龍咆のパワーを溜め始めた。

その間、俺は囷となって逃げ続ける。

逃げて避けて撃って逃げて。

そしてようやく、

「遠山！良いわよ！」

「よし、撃て！」

俺は瞬時にISに収納されていたナイフを展開、そして、背中に衝
撃が来る。

やろうとしている事は、あのシャーロックとの戦いで見せた、『桜花』だ。

背中からの圧力をトリガーに。

ISの力を拳銃に。

ヒステリアモードの力を、弾丸にッ！！！！

「くっらえええええー！！」

——パアアアアアアアアアアン！！

そのナイフは、銃声にも似た音を奏で、あのISを貫いた。

俺が貫いたのは心臓部分。

多分コアがあるのはここだ。

どうやら俺の見立ては正しかったらしく、あのISの動きはだんだんと鈍くなる。

勝った……。

ギギギギ……ギギギギ……ギ……ギギ。

しかし、まだだった。

相手のISはなんと死に際に最後に最大の攻撃。

対象は、IS学園。

キュイン、キュインキュインキュインキュイン。

中心部分の光が段々大きくなり、発射体勢にはいる。

「ちよっ！遠山！止めなさいよ！」

焦った凰が俺にそう問いかける。

「大丈夫だよ凰」

俺は溜めが完了するまであと十秒ほどになったISに背を向け、

「武偵憲章一条——」

タッタッタッタ。トリズミカルな足音が4つ、聞こえてきた。

その足音で俺は思わず頬を綻ばす。

「仲間を信じ、——」

「『仲間を助けよ！』でしょ！」

ガウンガウンガウン！！パアンパアン！キュイン！キュイン！ガガガガガガガガガ！

その音がやむ頃には、ボロボロになったあのISと、四人の影があ

った。

「ふう。あんたはほんっと相変わらずよね」

「キンちゃん大丈夫だった？怪我してない！？大丈夫？」

「はあ、ふう……。インドアな理子りんは疲れたよあ……キーくんだっこそしてえ」

「大丈夫ですか？キンジさん」

「ありがとう、皆。大丈夫だけど少し疲れたかな？だから——少し——」

あ……れ？何で目の前に地面が？ははッ。そういう事が。さっきの桜花で。

理由を判断した瞬間。俺の意識はものの見事にブラックアウトした。

「う……………？」

右腕の痛みになされ、俺の意識は覚醒した。

……状況は把握した。あのあと俺は出血多量で気絶をして、運ばれたのがここ、保健室。

「気が付いたか」

シャツとカーテンが引かれる。声色からして織斑先生だ。

「貴様は化け物か？ISがあるとはいえ超音速越えの速度をナイフで出すとは。まあ、そのせいで筋肉はズタズタ。間接部分も危ういところだぞ」

知ってます。二度目なので。

「まあ、なんにせよ良かった。これで死なれては文句をつけられるからな」

「あー。すいません……」

「所で、だ。遠山」

「……何でしょう」

「お前には姉、または二十歳近くの知人は居るか？」

姉……は居ないし、

二十歳近くの女の知人？

……居ない、な。

「それぐらいの歳の兄なら居ますが姉は居ませんね」

「……そうか。ならいい」

「はあ……」

「では、私は行く。少なくとも一週間は安静にしているよ」

パシユツ。

空気の抜ける音が聞こえ織斑先生の姿が見えなくなる。

そして織斑先生が居なくなるや否やで、

パシユツ！

「キンジさん大丈夫ですよ！」「おい、キンジ大丈夫かよ！」「うおお！人がいっぱい居すぎて理子ちよつとりタイア！」「キンちゃんに触れるなあ！この妾め！」「う、うるさいうるさいうるさい！だあまあれえ！奴隷2号！」

「……………うわっ」

これが俺の出せる最大の感想だった。

カオス過ぎるだろ。この状況。

兵器を持った人間と、存在が兵器に近い人間。

こいつら喧嘩したらどうなるか見たくないな。

「なあ所でキンジ。あのとき、お前どうしたんだ？」

いつの間にか俺の横に居た織斑が俺にそう問いかける。

だよなあ。あそこまで変貌していたら流石にバレるよな。

しかし、バレたからと言って言いたくない。

だから俺は、

「……悪い。いまはまだ、言えない」

「……そうか。わかった。んじゃ、いつかは話せよ?」

ああ。と言葉を返す。

多分、言わないだろうが。

「まあ、今は寝とけ。寝れるかどうかは知らないが」

ニヤニヤとしてそう言う織斑。

よし決めた、こいつは治ったら一番最初に殴ってやる。え?次?理子だ。

回りの光景に嫌気が差してきたのか。

妙に眠い。ああ、ゆっくりと意識が落ちていく。

回りの喧騒が気にならないほど静かに聞こえてきて、遂に俺の意識は闇に落ちた。

学園の地下五十メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間があった。

機能停止したISは直ぐ様ここに運び込まれ、解析が開始された。

今その場に存在する織斑千冬はというと先程の戦いの映像を何度も何度も見ていた。

「織斑先生？」

その空間に聞こえた声は、山田真耶。

織斑千冬の見ているディスプレイに割り込みで見えた山田真耶の顔はとてもじゃないが明るいとはいえないものだった。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、山田真耶はいつもよりきびきびとした動作で入室した。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「どうだった？」

「はい。あれは——無人機でした」

世界中で研究が進むISの、いまだ到達して居ない領域。

織斑千冬の顔が更に冷たいものになる。

何故ならば、そんなことができる人間が一人しか居ないことに気が付いてるからだ。

「どのような方法で動いていたかは不明です。遠山くんのあの攻撃で機能中枢を焼ききれていたので修復は不可能です」

「コアはどうだった？」

「……………それが、登録されていないコアでした」

「やはり、な」

「心当たりがあるんですか？」

「いや、無い。今は、まだ——な」

そういう織斑千冬の顔は教師、と言うよりは戦士といったほうが正しいのかもしれない。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

クラス対抗戦。と、突然の乱入……者？（後書き）

くっふう〜。ようやくキンジ無双がかけた。

長かったなあ〜。

ま、と言つことでこれから頑張ります！

応援してくれると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6416x/>

インフィニット・ストラトス～緋色の弾丸と白の騎士

2011年11月13日14時34分発行